

「高句麗地名」中の倭語と韓語

伊 藤 英 人*

1. 序論

1.1. 本稿の目的

本稿は、いわゆる「高句麗地名」の性格を考えるために予備的考察を行うことを目的とする。

1.2. 「高句麗地名」とは

いわゆる「高句麗地名」とは『三国史記』卷第三十五及び卷第三十七に記された「本高句麗」三州の諸地名及び卷第三十七所載の「鴨渌水以北」諸城の二種類の諸地名の総称である。「本高句麗」の三州について『三国史記』は次のように述べる。

「始与高句麗・百濟地錯犬牙，或相和親或相寇鈔。後与大唐侵滅二邦，平其土地，遂置九州。本国界内置三州。王城東北当唐恩浦路曰尚州，王城南曰良州，西曰康州。於百濟国界置三州。百濟故城北熊津口曰熊州，次西南曰全州，次南曰武州。於高句麗南界置三州。從西第一曰漢州，次東曰朔州，又次曰溟州。」卷三十四²

*専修大学ネットワーク情報学部特任教授

すなわち、「漢州＝京畿、忠北東部、黃海道」「朔州＝江原西部、咸南南部」「溟州＝江原東部、慶北東北部」を指す。周知の如く、統一新羅は今日の朝鮮半島の全てを領有したのではなく、上記三州以北は渤海の領域に属した。

盧泰敦（2012：249）が「景德王十六（757）年の地名改正があったときの事實を記述したものを母体として、その後の新羅末までにあった変動の状況を加えた、新羅時代に整理された資料に依拠して編纂されたものである」と述べるように「高句麗、百濟と新羅の三国の旧領を新羅が統一した」という新羅王権の觀念的な名称であり、全国を九州に分け、各三州ずつを旧三国に比定したものであるに過ぎない。各地域の三国時代の実際の帰属は極めて複雑であり、「高句麗地名」が歴史的な高句麗そのものの地名であると考えることは出来ない。本稿で括弧付き「高句麗地名」の呼称を用いる所以である³。

卷第三十七所載の鴨淵水以北諸城は、資料系統の異なる諸地名である。これらは總章二（669）年、唐将李（世）勣が都督府及び州郡を置くことが出来るものを泉（/ 淵）男生と協議し原案を作成し奏上した地名であり、唐側の原資料に由来するものと考えられるが、新旧の二重表記を含む点で同様の史料価値を持つ。

1.3. 『三国史記』について

周知の如く、『三国史記』は高麗代に金富軾（1075–1151）らにより1145年に撰進された。現存伝本及び影印本は以下の通りである。

正徳本⁴

正徳七壬申（1512）年慶州開版

洪武二十七（1394）年金居斗らによる。慶州（鶴林府）開版の伝本の摩滅の甚だしいのを見て正徳七壬申（1512）年刊行。「学東叢書」第一とし

て学習院大学東洋文化研究所から影印刊行（昭和三十九年1964年）。昭和六年（1931）年慶州玉山李氏本⁵の原寸影印した古典刊行会本を縮小影印。

乾隆本

乾隆三十六（1760）年 顯宗實錄字（1677年頃鑄造）による活字本。

田中俊明（1980:82）はこれを「あまり充分な校勘といえるものではない」とし、正徳本を「現時点において手にし得るテキストとして最良（ibid.86）」であると述べており、本稿が依拠するのは「学東叢書」影印本である。また、代表的な校注・訳注として以下のものがある。

『三国史記』 編纂刊行責任者 末松保和 学習院東洋文化研究所1964年

『三国史記・原文篇』 校訳者 李丙燾 乙酉文化社 1977年

『三国史記』 井上秀雄・鄭早苗訳注 平凡社1988年

2. 「高句麗地名」の表すもの

2.1. 二重表記

「高句麗地名」の中心をなす「高句麗三州地名」の特徴は757年の地名改正前と後の対比から一つの地名が二重（場合によっては三重）表記で現れることである。

「十谷県〔本徳頓忽〕」卷三十七

「鬼山県本高句麗烏斯含達県」卷三十五

「高句麗地名」は二重表記のないものも含めて総計197地名が確認される。

こうした二重表記から「十=徳」「谷=頓」「兎=烏斯含」「山=達」のようないべが得られる訳であるが、「徳=十」と「とを」、「頓=谷」と「たに」、「烏斯含=兎」と「うさぎ」のような日本語に類似した地名要素の存在が早くから知られていた。数詞等については内藤湖南（1907）、新村出（1916）で既に言及されている。これらは当初は「朝鮮語」後には「高句麗語」と観念され研究が行われてきた。

2.2. 古代朝鮮半島の非韓系諸言語資料

朝鮮半島最古の具体的な語の音形を確認し得る言語資料は揚雄（BC53–AD18）の『輶軒使者絶代語釈別国方言』（略称『方言』）に載る「朝鮮方言」27語である。松江崇（2019）によれば、殆どが漢語の語彙であり、一部に来源不明の語を含むとされる。来源不明のそれらの語が Japonic 或いは Koreanic の語と類似を示すことはない⁶。

『魏書』烏桓鮮卑東夷伝に見られる新羅統一以前の朝鮮半島現地諸言語の資料には次のようなものがある。

「辰韓在馬韓之東。其耆老伝世自言，古之亡人，避秦役來適韓國。馬韓割其東界地，與之。有城柵。其言語，不與馬韓同。名國為邦，弓為弧，賊為寇，行酒為行觴，相呼皆為徒，有似秦人。非但燕齊之名物也。名樂浪人，為阿殘。東方人，名我為阿。謂，樂浪人本其殘余人。今有名之為秦韓者。」『魏書』烏桓鮮卑東夷伝韓条

これは3世紀朝鮮半島南部洛東江流域の中国語話者についての記述である。森博通（2011）は漢高祖の避諱をしない「邦」が「有似秦人」の印象を魏代の中国人に抱かせたと解釈している。

「句麗呼相似，為位。」「溝瀆者，句麗名，城也。」『魏書』烏桓鮮卑東夷伝高句麗条

これらは3世紀高句麗語で「意味の分かる」ただ二つの語の例である。Beckwith (2004) は「位」は不明、「溝瀉」は日本語の kura (蔵) と同源と看做している。

「王姓夫余氏，号於羅瑕，民呼為鞬吉支，夏言並王也。妻号於陸，夏言妃也。」

『周書』異域伝百濟条

「鞬吉支」は『日本書紀』(以下『紀』)では「コニキシ・コキシ」で現れ河野六郎 (1987) が *ken kiči を再建したように中期朝鮮語(以下 MK)の khin kiic^A に繋がる。「妃」は『紀』ではラリケ・オリケで現れるが、これらは「於陸」「於羅瑕」と共に後代の韓語に反照形を持たない。河野六郎 (1987) は百濟が王族(夫余系言語)と民衆(韓系言語)の二重言語国家であったことを指摘している。

「百濟語」については『三国史記』の以下の例が語の情報を示す。

「悦城県本百济悦己県」卷三十六

「潔城郡本百济結己郡」卷三十六

「赤鳥県本百济所比浦県」卷三十六

「城=己」は上代日本語に「キ=城」として借用されたが、これは百濟地域にのみ見られる語である。「赤」を表す「所比」は高句麗地名「沙伏・沙非」と音形上の類似を示し、上代日本語の「ソホ=赤土」「サビ=錫」と比較されてきた。

「赤城県本高句丽沙伏忽」卷三十五

「赤木 [一云沙非斤乙]」卷三十七

李基文（1975：48）は百濟語の「所比＝赤」、高句麗語の「沙伏・沙非＝赤」を夫余系語彙と看做している。

3. 「高句麗地名」の言語

3.1. 二重表記の主体

「漢州＝京畿、忠北東部、黃海道」「朔州＝江原西部、咸南南部」「溟州＝江原東部、慶北東北部」及び鴨綠江以北の諸城名からなる「高句麗地名」に日本語に類似する語が含まれることは、日本語に類似した言語がかつて朝鮮半島に存在した事実の反映と看做すことが出来る。Janhunen (2003) や Vovin (2017) を始めとする近年の諸研究でもこれらを para-Japonic 及び Peninsular-Japonic 等の呼称で呼んでいる。本稿では、暫定的に「大陸倭語」の仮称を用いる。

始めに確認すべきは、757年の景德王による地名改定が、先行する何らかの資料に基づくものであったとして、音仮名による表音表記的な旧地名を同意の漢字に置き換えることが可能だったのは、旧地名の語を用いる民族で、かつ、漢字を習得していた民族であったと考えざるを得ないという点である。

すなわち、①「大陸倭語の話し手が全て日本列島に移り住み、地名だけを残していた」②「大陸倭語の話し手が朝鮮半島に残っていたとしても、その言語が無文字社会で、支配民族がその言語を解しようとしなかった」とした場合、こうした二重表記は起らなかったはずだと考えられるからである。福井玲（2013：179）はこれについて、「北海道のアイヌ語起源の地名（中略）アイヌ語の意味とはかけはなれた、単に音を日本語の漢字の音なり訓で表しただけのものがほとんど」であると述べている。「○○内」「○○別」などの地名は確かに音訳地名であるが、表記者たる和人がアイヌ語の意味を理解して名付けたものでないことは明らかである⁷。

もうひとつ確認しておくべきは東夷伝倭人条の記述から、既に3世紀の日本列島では後の日本語へと繋がる言語が確実に話されていたと推定される事実である。

以上から、757年に記録された「高句麗地名」の言語的性格を考える際に、「三国時代以来漢字を使用して来た民族による名付けである」ことを前提に二重表記の主体の性格を考える必要がある。以下に先行研究の諸説を見つつ考察を加える。

なお、Vovin (2017) が述べるように、新羅、百濟、伽耶の地名にも大陸倭語要素が認められるため、大陸倭語の分布の全体像を解明するためにはそれらを含めた検討が必要となる⁸。

3.2. 漢語説

「高句麗地名」の言語を漢人のそれと考えた代表的な研究は河野六郎 (1993) である。要約すれば以下の如くである。

- い) 夫余の土地には漢人が原住していたが外から貊族の夫余がそこに侵入し漢人を支配し、「漢王」の称を受け継いだ。
- ろ)『三国志』「夫余」条から沃沮の地にも漢人が居住していた。
- は) 漢が貊族以前に原住した（貊族と）別の民族であった可能性がある。
- に) 蝮族⁹が中国西北辺から匈奴の圧力により東方へ移動した際に、この移動の波に巻き込まれて、旧満州地方に移っていった。
- ほ) 蝮族の夫余に追われ漸次半島を南下し、その過程で貊族と混住するようになったため「漢貊」と称されるようになった。
- へ) 注目すべき事実は朝鮮語において「倭」と「漢」が混同されることである。中期朝鮮語では「倭」の訓をieiと訓んだが、これは「漢」の字音である¹⁰。

「高句麗地名」が漢語である可能性については馬淵和夫他 (1979) も述

べており、また俞昌均（1999）は「濶」の言語学的検討を通して、「濶」が「斯羅」「韓」「倭」「高句麗」へと分化した可能性について述べている¹¹。

朝鮮半島で最も早く漢字文化を受容した民族は濶人であった。李成市（2015）、田中史生（2016）が述べるように、1990年代に発見され、2000年代に公開された平壤貞柏洞364号墳出土の初元四（BC45）年の樂浪郡県別戸口簿と『論語』竹簡は、紀元前一世紀の朝鮮半島における漢字使用を伝える資料である。板櫛墓という墓制の特徴から衛滿朝鮮以来の現地出身の樂浪郡府属吏を墓主と推定され、戸籍には「BC45年の戸籍数と前年度からの増減が記され、前漢の地方支配の文書行政システムが樂浪郡にもそのまま適用されていたことが知られる。BC45年には平壤の「現地系」人士が『論語』（中国内地製）を学んで属吏となり、漢字を使用していたことが知られる訳である。

紀元前後の樂浪に存在した現地系民族として確実に存在が確認できる民族は濶人である。平壤樂浪古墳群から発掘された銀印には「夫租巖君」の印記があり、武田幸男（1997）は、夫沮（=沃沮）すなわち咸鏡道一帯から遠い平壤の地に埋葬されるほどに濶人が樂浪郡との関係を深めていた事実を指摘している。濶に関する文献史学からの研究には、李成市（1997）、李成市（2000）、吉本道雅（2009）があるが、それによれば、濶人は生業として、漁労、海産物の遠隔地への輸送・運搬・販売に従事した。『說文解字』には「樂浪番国」に算出する海産物が多く記載されている。また、BC2世紀から中国姓・中国式姓名（例：南閭 BC128）を使用し、同姓不婚の習俗を持ち、天文に通じていた¹²

濶人の活動時期と活動地域について見ると、BC128年には穢の南閭が漢に28万人を連れて投降し蒼海郡設置に繋がった。武田幸男（1997：264-273）が述べるように、蒼海郡治は咸南咸興か永興に比定され、紀元前2世紀に、中国名を持った濶人が咸鏡南道で活動していたことが知られる。漢代には上述の如く樂浪郡治すなわち平壤での活動が見られる。東夷伝韓

条¹³に「桓靈之末，韓漢彊盛，郡縣不能制，民多流入韓國。」の記載が見られるよう漢条に「に韓人と共闘して中国の郡縣支配に抵抗した事実が確認される。

何よりも無視すべきでない事実は、同書漢条に「自單單大嶺以西屬樂浪郡，自領以東七縣，都尉主之。皆以漢為民。」という記載のあることである。これを素直に読めば、樂浪郡の「民」も漢人であったことになる。同書韓条には「國出鉄，韓・漢・倭皆從取之。」に見られるように弁辰，すなわち半島最南端で韓，倭と接触と接触していた事が確認される。魏晉代史料としては迎日郡（浦項）出土とされる銅印に「晋卒善穢佰長」が出土している¹⁴。浦項は慶北最南端である。以上から漢人の活動範囲が西南部を除く朝鮮半島の広い範囲に及ぶことが分かる。「漢人」としての活動の終焉は548年の高句麗による百濟侵攻時に「漢人」が動員された記事を最後とする¹⁵。

「高句麗与穢人攻百濟獨山城，百濟請救，王遣將軍朱玲領勁卒三千擊之，殺獲甚多。」

卷四新羅本紀真興王九（548）年九月条¹⁶

吉本道雅（2009：35–36）は「近年の考古学的知見をも勘案すれば、江陵など江原道南部への新羅の文化的影響は夙に四世紀後半に認められるが、六世紀半ばには、「漢人」はなお高句麗の指揮下に百濟・新羅と交戦しえたのであり、江原道全域が新羅の支配化に入るのは、それ以降のことである」と述べている。実際には統一新羅以降も漢人は「靺鞨国民」の名で存在し続けた¹⁷。吉本道雅（2009）は、①「漢貊」は一語であり、広く夫余、高句麗から東漢を含む地域の汎称だった、②「漢貊」から「貊」を去った「漢」が「東漢=朝鮮半島日本海岸住民」を指すようになるのは魏晉代以降、樂浪帶方二郡で「民」すなわち漢人同様に扱われた現地人及び郡吏が蔑称たる「貊」を忌避したことによるとする。また、白鳥庫吉以来主張されて

きた「濶貊民族」の移動とその過程での分化という仮説は、夫余が吉林西団山文化、東濶は原三国時代の考古学的文化に包摂されるものであり、歴史時代以降のひとつの「濶貊民族」の「移動・分化」も、考古学的には否定されざるを得ない（吉本道雅2009）とされる。河野六郎（1993）が白鳥説によって歴史時代以降の濶貊の移動分化説は、これによって否定されることになる。すなわち、有史以降の濶の東渡南下はなかったと考えるべきである。

以上のことから、紀元前2世紀から統一新羅以降を含む長い時期に亘って、咸鏡、江原、慶北を中心とする日本海岸を中心としつつも半島の広い範囲で濶人が活動していた事実が確認される。濶人が紀元前から漢字を使っていた状況証拠は多いが、濶人が書いたことが確実な文字資料は現在まで出土していない。また「濶語」の語も一語も判明していない。王権の庇護を受け、「民」と同等に扱われる程に漢文化を濃厚に受容した少数民族が自らの言語の地名を漢字表記し、それを後代に残す可能性があるか否か、検討が必要である¹⁸。なお、濶語は8世紀以降の靺鞨人の言語として渤海側で使われていたと考えられる。

3.3. 高句麗語説

多くの論者が「高句麗地名」を高句麗語の地名であると考えてきた。Beckwith（2004）は高句麗語を日本語の大陸における姉妹語であるとし、両者の祖語である Common Japanese-Koguryoic を措定、再建している¹⁹。

周知の如く、高句麗の時代区分は首都の変遷によって「前期：卒本時代：紀元前後～AD3世紀初」「中期：国内時代 3世紀初～427年」「後期：平壤時代427年～668年（滅亡）」に三分される（田中俊明2008）。高句麗の支配層が单一言語集団であったか否かも不明だが、高句麗語が南下の結果として朝鮮半島の言語となったものであるという事実を先ず確認する必要がある。高句麗が楽浪郡を接収するのは313年である。「高句麗地名」の中心を

なす漢州、特に尉礼（漢城）地域を高句麗が支配するのは475年からであり、その後実質的にこの地域を支配したのは76年間のみであった²⁰。

しかし、この時期の高句麗による支配は地名においてその後に深い刻印を残した。新羅接收以後の時期の出土資料から旧高句麗の行政単位名が継続して使用された証拠が確認される。1990年発見のソウル市衿川区始興洞・安養市境界の虎山山城の Han-umur 遺蹟第二井戸から「仍伐内力只乃末」銘文の青銅匙（新羅時代）が発見されており、卷三十五「穀壤県本高句麗仍伐奴郡」の旧名と一致する。京畿抱川郡郡内面の半月山城出土の「馬忽」と刻まれた新羅時代の銘文瓦が見つかっており、これは「堅城郡本高句麗馬忽郡」卷三十五に対応する²¹。高句麗がこれらの地域に漢字の名を与えたと考えられる475年～551年は、後述の如く、高句麗における文字使用が正に本格化していた時期に相当する。「馬忽」の「忽」は「城」に「改正」された「高句麗地名」語の「城」に相当するが、もしも東夷伝高句麗条の「城=溝溝 *koro」が5世紀までに *koro>*kor (apocope) の音韻変化を経て「忽」と表記されていたとすれば、「城」を意味する「忽」は、「高句麗語」の語であることになり、その蓋然性は高いと言わざるを得ない²²。

高句麗の漢字使用とそこから伺われる高句麗語の類型的特徴について見てみよう。高句麗で漢字使用が本格化するのは313年の楽浪郡滅亡の100年後からである。373年には太学を設置して王族、貴族に五経の教育が行われた。414年の広開土王碑文、また牟頭婁塚墓誌や2012年発見の集安高句麗碑は正格漢文で書かれている²³。

427年の平壤遷都後、約半世紀を経た5世紀後半、現在の忠州地方を領有した高句麗は新付新羅人に命令する内容を持つ石碑を同地に建立したが、これは漢字圏最初の変則漢文の例となった。中原高句麗碑²⁴には次のような例が見える。

「太位諸位上下衣服來受教」

太位と諸位の上下は衣服を来て受けとれと（王が）教した²⁵

〔(主語 a が) [主語 b が 目的語を 動詞 b して 動詞 b せよ] と動詞 a する〕という構文は完全にアルタイ型の統語構造をなしており、これは中国語文では全くあり得ない、非中国語を表記した漢字文である²⁶。このことから、「高句麗語」がアルタイ型の文法を持つ言語であったことが推定される。同様の統語構造は「高句麗地名」からも伺える。

王蓬県>遇王県（京畿高陽郡知道面幸州）

道臨県>臨道県（江原通川郡臨南面）

津臨県>臨津県（京畿坡州郡臨津面）

地名改正により、OV>VOへと、すなわち中国語型への修正がなされている。こうした例、特に中原高句麗からは高句麗が漢字を自言語流に「カスタマイズ」して使用していたことが窺える。中原高句麗碑の書者は、少なくとも書者の「頭の中では」高句麗訓と漢字の対応を行いつつ漢字文を書いたはずであり、訓の胚胎は5世紀の高句麗ではないかと考えられる。字訓、字音の成立時期の問題は百濟及び新羅におけるそれと共に深く講究すべき問題である。

漢人とは異なり、高句麗人名は基本的に滅亡まで中国化することはなかった²⁷。

なお、「高句麗語」は渤海の言語として8世紀以降も話し手が存在し続けたと考えられる²⁸。

3.4. 百濟語説

都守熙（2005ab）は「高句麗地名」の多くを前期百濟語と看做す²⁹。前期百濟とは漢城百済のことである。首都による百済の時代区分を田中俊明

(2008) に従って示せば次の通りである。

前期 漢城時代	? ~475年
中期 熊津時代	475年（実質477年）~538年
後期 泗沘時代	538年~660年（滅亡）

漢城百済は、少なくとも3世紀末~4世紀初頭に漢城地域を中心に成立しており、その建国神話を高句麗と扶余出自に求めている³⁰。

「我是皇天之子，母河伯女郎，鄒牟王。」「廣開土王碑文」414年

「始祖東明聖王，姓高氏，諱朱蒙「一云鄒牟，衆解。」高句麗本紀始祖東明聖王

「百濟始祖溫祚王，其父，鄒牟。」「謁始祖東明王廟。」百濟本紀始祖溫祚王

しかし扶余建国神話は『論衡』に初出があり³¹、高句麗が扶余神話を取り込んだのは「扶余支配の正当性の根拠」（瀬間正行2018：138）を示すためとも考えられている。溝口睦子（2009）が述べるように神話は政治的理由その他により借用、剽窃が可能である。歴史的には百済は漢城を中心とした地域で王権を確立し後に馬韓諸国を併呑していったと考えられている。神話について更に一步踏み込んで述べるならば、百済建国神話には中国江南との関わりを仄めかす次のような記載もある。

「或云，朱蒙到卒本，娶越郡女，生二子。」百濟本紀始祖溫祚王³²

百済は『三国史記』の説く所に拠れば高句麗の太学設置と同時期の近肖古王代に漢字の使用を開始したことになっている³³。百済出土木簡には倭国のそれと似た音仮名が使用され、高句麗及び新羅とは異なる独自の漢字文化を持っていたことが知られる³⁴。様々な記録から百済が魏晋代には帶

方郡との深い関わりを通じて漢字文化を高句麗とは別途に獲得しており、南朝とも深く関わっていた³⁵ことは呉音の日本伝来のみならず、いわゆる古韓音との関わりの研究において見逃せない事実である。李成市（2000：52–61）は百濟人が新羅人とは異なり、中国語の口頭運用能力もあったことに言及している。

問題の高句麗三州地名に関して、475年の漢城陥落まで長くその地を支配し、かつそれまでに漢字使用を行っていた百濟支配者の言語が漢州等の「高句麗地名」の言語である可能性は極めて高いと考えられる。

姓氏については、BC2世紀以来の漢や8世紀以降の新羅のような中国式姓名への改称はなく固有語名を使用した。

百濟の王族、貴族は唐に連行されるか、日本へ亡命し、大陸倭語と関連すると思われる百濟王族語は百濟滅亡後程なくして消滅したものと思われる³⁶。韓系の百濟民衆語は同じく韓系の新羅語の方言として中世韓語の形成に参加したものと思われる。

3.5. 地名改正時までの新羅の漢字使用

韓語系言語集団と考えられる新羅では6世紀初頭から漢字使用迎日冷水碑（503）に見られるように王権が漢字の使用を開始した。新羅の漢字文化は高句麗、百濟と異なり、高句麗から二次的に受け入れたものであり、李成市（2000：52–61）に述べられるように中国語の口頭運用能力はこれを欠いていた。金文京（2010）は統一新羅時代の慧超（704–787）『往五天竺国伝』に本来なら「有髪女・留髪女」となるべき語が「女人在頭」という変則漢文で書かれた事実から、新羅では訓読で漢文を読んでいたことを述べている。新羅では夙に6世紀には漢文訓読が成立していたと考えられている³⁷。漢字音については山臻撰入声韻尾の流音化が三国時代に起っていたかが最も重要な問題となる。「集落」を表す語の3世紀から三国時代にかけての音韻変化を考える際、高句麗語の「溝濶<忽」韓語の「卑離<

伐～火～体」のをどう考えるかと不可分の関係を持つ³⁸。

4. 字音

4.1. 字音の音通の可能性のある例

馬淵和夫他（1979）に言及があるが、「高句麗漢字音」の解明はまだなされていない。「高句麗地名」の内、「音通」と思われるものを以下に示す。「高句麗地名」の用字の上古音、後漢音、魏晋音（特に東部）、中古音、古韓音との比較再建が今後の課題となる³⁹。

上 ≈ 車20, 召 ≈ 鄒25, 黢 ≈ 金29, 買 ≈ 馬・省 ≈ 城35, 述 尔 ≈ 首泥39, 內 乙 = 內 尔・
買 ≈ 米42, 耶 ≈ 夜・耶 ≈ 牙55, 首 ≈ 守・知 ≈ 鎮66, 仇 乙 ≈ 屈79, 夫 斯 ≈ 仇 史92,
斤 ≈ 嘉101, 薩 ≈ 霜125, 於 支 ≈ 翼127, 墬 ≈ 斤 ≈ 居131, 生 ≈ 城132, 于 ≈ 郁134,
河 ≈ 何・瑟 ≈ 西・羅 ≈ 良136, 乃 ≈ 仍137, 達 ≈ 守141, 吐 ≈ 隴150, 兮 ≈ 卿154,
于 珍 也 ≈ 蔚 珍156, 野 戸 ≈ 野158, 助 攬 ≈ 才 攬 ≈ 真 安159, 伊 ≈ 緣162, 于 戸 ≈ 有 鄰
163, 悉 ≈ 史165, 肩 ≈ 肖 利・夫 妻 ≈ 巴 利186, 積 利 ≈ 赤 里193, 似 ≈ 史198

「述 ≈ 首」「知 ≈ 鎮」「壚 ≈ 斤 ≈ 居」「瑟 ≈ 西」「乃 ≈ 仍」「兮 ≈ 卿」「伊 ≈ 緣」「悉 ≈ 史」のように韻尾の有無が捨象されているように見られる例、「仇 乙 ≈ 屈」「野 戸 ≈ 野」のような2音節の1音節化、或いは「於 支 ≈ 翼」のような1音節の2音節化とも取れる例がある。

5. 大陸倭語と解し得る語

5.1. 本章の目的

以下、本章では、諸先行研究を踏まえ、大陸倭語と解し得る可能性のある語を含む地名を検討し、次いで次章で韓語と解し得る語を検討すること

にする。

5.2. 「密=三」

「高句麗地名」としては孤例だが、新村出以来言及されてきた語である。朝鮮半島全体では新羅良州にもう一つ「密=三」の地名が存在する。

- a. 「三峴県 [一云密波兮]」（江原楊口郡方山面）106⁴⁰
- b. 「玄驥縣本推良火 [一云三良火]」（慶北達城郡玄風面） 卷三十四

先に非高句麗地名である b について述べる。MK の「推」の訓は mir-R である⁴¹。「良」は新羅語の漢字表記である郷札、後代の吏読及び釈読口訣で連用形語尾 -a/-ə であり、「推良=三良 = *mira」から「推=三 = *mir」が得られる。「火」は「集落」を意味する新羅語 *per である。新羅地名についての考察は本稿の対象ではないが、江原道楊口郡と慶尚北道達城郡に「三=密」の地名が存在することを先に確認しておく。

先行研究の解釈は以下の通りである。「三国時代に三は日本語と同じくミ又はミツ、少なくともミルといつたのであらうと思ふ。（中略）密には弥知の音があつたらしい（卷三十四單密=武冬弥知）」新村出（1916）、「三=密～推（訓 mir-）は比自火郡（昌寧）の地名に見られるため、「三=mil 又は mit は韓語と考へなければならぬ。（中略）新羅語純粹の数詞「三」は「悉直國>三陟」の「悉 siet=sei」でありこれが今日の朝鮮語に繋がる」「韓の地に残された数個の数詞は現代朝鮮語のそれと全く違つてゐて、むしろ国語の夫れに近い」（河野六郎1945/1979：262）、「三十四玄驥縣本推良火 [一云三良火] 慶北達城郡玄風面に拠り「考へ様では倭人の北方からの南下の迹であるかも知れない」河野六郎（1957）。再建形は *mir（李基文1968/1991, 1972/1975），*mir（Beckwith2004），*mirV（俞昌均1980），*mir（板橋義三2003），*mit（Vovin 2017）である。再建形の音節末子音

を^{*}-r/-lと解釈するか、^{*}-tと解釈するか、或いは寄生母音^{*}-Vを指定するかの差が認められる。河野六郎（1945）では韓語と国語（日本語）の共通性が論じられたが、河野六郎（1957）では「倭人の南下の迹」と捉えなおされ、1993年論文の濶語説へと繋がったものと思われる。高句麗漢字音の再建に俟たざるを得ないが、本稿では仮に^{*}mirを再建し次のような音韻変化を仮定する⁴²。

^{*}mir > ^{*}mir 大陸倭語

> mi 上代日本語

5.3. 「弓次=五」

「五谷郡〔一云弓次云忽〕」（黄海瑞興郡瑞興面）72

正徳本は「弓」、乾隆本は「兮」を作る。『新增東国輿地勝覽』末松保和（1937: 9）は「于次呑忽」とする。高句麗地名の研究では高木雅弘（2016）が「高句麗地名」の數文字について異本校勘に基づく言及をしている。今、「于次呑忽」に従うが『文献備考』その他邑誌諸版の確認作業が必要である。先行研究の解釈は以下の如くである。「『東国輿地勝覽』『東國文獻備考』の于次呑忽により于次=五」（新村出1916）、「于次呑忽 日イツ」（河野六郎1957）、「アルタイ系諸言語では狭い母音 i, u の前の t は破擦音化せず、モンゴル語、満州語、南ツングース語グループのナナイ語では i の前で、t は例外なく破擦音化している（中略）。次という漢字で表そうとした母音の音色は明確でないが、それは i ~ i ~ u のような、狭い母音であったろう。次で表そうとした音節の頭子音は ts であったと推定される」（村山七郎1962）、「高句麗語の c は^{*}tu ~ ^{*}tü にさかのぼり得る。「弓」は日本語の「イ」iに対応する可能性はない。日本語の C1iC2u が高句麗語で C1uC2 になった例はほかに確認されない。」（高木雅弘2016）。再建形は üc : 日itu（李基文1972）、^{*}ütsi : 日^{*}itu（Beckwith2004）、^{*}uc（五）: 日

itu (宋敏1966), *üse (崔南熙1999a), *učer (俞昌均1980), *yuci : proto-Insular Japonic *itu (Vovin2017), *uc < *uti 日 itu (板橋義三2003) である。「次」字を含む「于次」「次若」「忽次・古次」に共通した「高句麗語における *t の破擦音化」を措定する村山七郎 (1962) の所論は説得力を持つ。板橋義三 (2003) は恐らく metathesis を措定すると思われるが, Vovin (2004) は *yuci と *itu の間にどのような音韻変化を仮定するのだろうか。「于」の音韻地位は「遇摺虞韻合口三等乙平声喻母 羽俱切」, 「次」のそれは「止摺至韻三等甲開口去声清母 七四切」であるが, 仮に以下の音韻変化を仮定しておく。

*itu > *itju > *itʃu > *ytʃu > *ytʃ 大陸倭語

> itu 上代日本語

5.4. 「難隱=七」

「七重県 [一云難隱別]」(京畿坡州郡積城面) 36

先行研究の解釈は以下の如くである。「難隱=七」(新村出1916), 「難隱 cf. ナナ (倭人の南下の迹)」(河野六郎1957), 「満州語 nadan : 日⁴³ nana *nanan>nadan か *nadan>*nanan>nana かの発達を遂げたものであろう。ツングース, 高句麗, 日本語の 7 をあらわす数詞が同源であることはうたがいえない」(村山七郎1962), 「難☆nan (seven) : *nana (id.), 隱*ir (genitive-attributive suffix morpheme) : *na (Beckwith2004), 「*nanin : 日 nana, .nadan (id.)」(宋敏1966), 「*nanən (七) : 滿州語 nadan : 日 nana」(李基文1972), *nanan (崔南熙1999a), 「nanə̯n」(俞昌均1980), 「nanin 日 nana 滿州語 nadan エヴェンキ語 nadan ラムート語 nadan」(板橋義三2003)。

「難」の音韻地位は「山摺寒韻開口一等平声泥母 那干切」, 「隱」は「臻

摂隱韻開口三等乙上声影母 「於謹切」である。伊藤英人（1995：304, 2013c：75）で指摘したが、「終声の初声化」すなわち先行字の韻尾が後続字音節の頭子音になる現象が三国時代漢字音に遡ることが確認される点で重要な例でもある。今、ツングース諸語を考慮の外に置いて再建すれば以下の通りである。

*nanan > *nanən 大陸倭語

> nana 上代日本語

5.5. 「徳=十」

「十谷県〔一云徳頓忽〕」（黄海谷山郡谷山面）69

先行研究の解釈は以下の通りである。「徳トクカト」（新村出1916）, 「徳トヲ（倭人の南下の迹）」（河野六郎1957）, 「徳 tek～te は日本語の töwo < *tewu に対応」（村山七郎1962）, 「*tək (十) : 日 töwo」（李基文1972）, 「*tək : 日 *tə, töwo」（Beckwith2004）, 「*tək (十) : 日 töwö」（宋敏1966）, 「徳は上代日本語の tö と対応すると見て問題ない。「トヲ」を töwo と言ったのは, 「トヲカ」の「～カ」の隠された母音（ウ）カ（例：ムユカ tö+uka>tö.wuka>töwoka）」（高木雅弘2016）, 「徳=十」（都守熙2005b）, 「*təkV」（崔南熙1999a）, 「*tək」（俞昌均1980）, 「*tok」（板橋義三2003）。

「徳」の音韻地位は「曾摂徳韻開口一等入声端母 多則切」である。今、以下の再建を仮に試みておく。

*tək > *tək 大陸倭語

> tö⁴⁴ 上代日本語

5.6. 「頓・旦・呑=谷」

「旦」

「水谷城県〔一云買旦忽〕」（黄海新溪郡多栗面）68

「呑」

- a. 「五谷郡〔一云弓次云忽〕」『新增東國輿地勝覽』で「呑」に（黄海瑞興郡瑞興面）72
- b. 「原谷県〔一云首乙呑〕」（咸南安辺郡瑞谷面）123
- c. 「於支呑〔一云翼谷〕」（咸南安辺郡文山面梧山里方面）127
- d. 「習比谷〔一作呑〕」（江原通川郡歛谷面）149

「頓」

「十谷県〔一云德頓忽〕」（黄海谷山郡谷山面）68

先行研究の解釈は以下の如くである。「頓=谷」（新村出1916）、「頓：タニ（倭人の痕跡は中部にも及ぶ）」（河野六郎1957）、「*tan：日 tani」（村山七郎1962）、「*tan～*tuan：日 tani」（李基文1972）、「*tan：日 tani」Beckwith (2004)、「*tan（村）：日 tani（谷）」（宋敏1966）、「tanV」（崔南熙1999b）「*tən」（俞昌均1980）、「*tən 頓*twən 呑 *θən 日 tani 高句麗語 CVC：日 CVCV の最もよい例」（板橋義三2003）。

上述の如く「弓次云忽」の諸文献の諸版本の字を確認する必要がある。黄海・咸南・江原に集中し、京畿、忠清に存在しないことも特徴であるかもしれない。それぞれの音韻地位は「旦：山摶翰韻開口一等去声端母 得按切」「呑：臻摶痕韻開口一等平声透母 吐根切」「頓：臻摶困韻合口一等去声端母 都根切」である。「頓」の合口性、主母音の開口度が問題となるが仮に以下の再建を試みる。

*tani ~ *təni > *tan ~ *tən 大陸倭語

> tani 上代日本語

5.7. 「烏斯含=兎」

「兎山県本高句麗烏斯含達県」（黄海金川郡兎山面）49

先行研究の解釈は以下の如くである。「烏斯含 ウサギ(倭人の痕跡)」(河野六郎1957, 1987), 「*wusigam 日 wusagi トルコ路 tawiʒ^{yan}」(村山七郎1962), 「*usaxam : 日 usagi ニヴフ⁴⁵ osk」(李基文1968), 「*osiva : 日 *usaki」(Beckwith2004), 「*osakam : 日 usagi」(宋敏1966), 「烏斯含 猪兎に烏斯なる文字を宛てて居る。含 ham は押 ap に通じ山の義を有するものではなからうか」(学習院大学東洋文化研究所・小倉進平2017), 「百濟前期語 *osaham (兎)」(都守熙2005b), 「əsə̚rvam : 日 usagi」(俞昌均1980), 「*osegam : proto-Insular Japonic : *wosangi」(Vovin2017), 「*usivam : 日 usagi : ニヴフ語 oske」(板橋義三2003)。

李基文 (1968), 板橋義三 (2003) はニヴフ語に言及している。音韻地位は「烏：遇摂模韻合口一等平声影母哀都切」「斯：止摂支韻開口三等甲平声心母 息移切」「含：咸摂覃韻開口一等平声匣母 湖南切」である。仮に以下を再建する。

*wosigam > *usigam⁴⁶ 大陸倭語

> wosagi ~ usagi 上代日本語

5.8. 「賈尸=蒜」

「蒜山県本高句麗賈尸達県」(咸南元山市南部) 128

「蒜」を言語学的先行研究では「蒜」と看做すが、正徳本は「蒜」に作る⁴⁷。今、「蒜」に従うが、諸本、他資料の確認を要する。先行研究の解釈

は以下の如くである。「*mair : MKman_R : 日 mira (堇) : 蒙 manjgirsun (wilde Zwiele)⁴⁸」(李基文1968), 「*meyr (garlic) : 日 *mira (leeks, Chinese chives, fragrant-flowered garlic 堇)」(Beckwith2004), 「*mayl (蒜) : 日 mira : MKman_L : 蒙 .manggir」(宋敏1966), 「買戸は日本語のミラと比較されてきたがヒル (蒜) と比較するのが妥当ではないか。*Nbiru > *mir (u) <mel, エ列乙類の母音 ë (合成語ではaと交替するもの) も高句麗語では流音になる」(高木雅弘2016), 「*mə*sə*r」(俞昌均1980), 「*mera : *mîra proto-Insular Japonic」(Vovin2017), 「*məl *meir : 日 mira : MK man_L : 蒙 manggir-sun」(板橋義三2003)。

半島南部の咸安城山山城出土木簡（6世紀中～末）に「蒜戸」があり、権仁瀚（2018）は中世韓語の man_RLH（大蒜）に比定している。周知の如く、新羅語の漢字表記は語幹を訓で、語幹末音と語尾を音仮名（音借字）で書く「訓主音従」⁴⁹の原則によるため、咸安山城出土木簡の「蒜戸」に中世韓語の man_RLH（大蒜）を宛てるのは可能である⁵⁰。一方、「買戸」は音借字表記である⁵¹。李基文は「買=水」については*mieを再建するのに「買戸」には*mairを再建しており、これは韓語形に引かれた再建であると思われる。「買」の音韻地位は「蟹摶蟹韻開口二等上声明母 莫蟹切」であるが、上古音の前舌高母音性を考慮して*meを再建する。「戸」は8世紀半ばの郷札では-rs～rh、麗代釁讀字吐口訣では-rqを示している。俞昌均・橋本万太郎（1973）が上古音との関連を指摘している。伊藤英人（2012）は麗代に rh/rs > rq の音韻変化があったと見て「第一喉頭化音化」とした。いずれにせよ「戸」の再建形を*-rと見ることに無理はない。以下の再建を試みる。

* mera > * mer 大陸倭語

> mira 上代日本語

中世韓語の man^hrLH や蒙古語の manggir より上代日本語 mira 方が近いと思われ、大陸倭語における apocope の例と思われる⁵²。元山という濱の中心地で確認される語でもある。

5.9. 「忽次・古次・串=口」

「忽次=口」

- a. 「簞項口県 [一云古斯也忽次]」(京畿始興郡秀岩面安山) 26
- b. 「楊口郡 [一云要隱忽次]」(江原楊口郡楊口面) 103

「古次=口」

穴口県 [一云甲比古次] (京畿江華郡江華面) 63

「串=口」

泉川口県 [一云於乙買串] (京畿坡州郡交河面) 38

「忽次」「古次」は音借字、「串」は訓借字であると思われる。諸家の解釈は以下の如くである。「*kuuts< *kutu:kuti~kutu (口) 破擦音化 南朝鮮方言 kul」(村山七郎1962),「忽次～古次⁵³ クチ (倭人の南下の迹)」(河野 1957),「*xolč~ *koč : 日 kuti」(李 基 文 1968),「*kuərtsi : kuti」(Beckwith2004),「*koc~*kolc : 日 kuti」(宋敏1966),「*kuse (口・串)」(都守熙2005b),「*kosa」(崔南熙1999b),「*kəčə́r」(俞昌均1980),「*xurc~*kurc~*kuci : 日 kuti この語は従来日本語との比較で最も重要なものとして考えられてきた。この高句麗語の語とともにその異形態 *koci (古次) が存在することで古代日本語の形態素との比較がより信憑性を増したと考えられる」(板橋義三2003: 145)

現代韓語でも「串」は字音 koan とは別に地名においては koc と訓読みし「岬」の意味に用いる⁵⁴。村山は「于次=五」「次若=首=ツノ」の例と共に「高句麗語」における *t の破擦音化の例と見ている。

「串」は韓訓であり、新羅語的な漢字使用を彷彿させる⁵⁵。音韻地位は「忽:

臻摶沒韻合口一等入声曉母 呼骨切」「古：遇摶姥韻合口一等上声見母 公戸切」「次：止摶至韻三等甲開口去声清母 七四切」である。以下の再建を試みる。

$*kurti > *kurtfi \sim *kutfi$ 大陸倭語

> kuti 上代日本語

5. 10. 「伏斯=深」

「深川県〔一云伏斯買〕（京畿加平郡下面）」102

諸家の解釈は以下の如くである。「puksi：日 fuka-si」（村山七郎1962）、「poksa（深）：日 fuka-」（李基文1968）、「 $*puk$ ：日 poka, 斯 $*si$ (adjective-attributive suffix morpheme)」（Beckwith2004）、「：日 fuka」（都守熙2005b）、「 $*pükse-$ 」（崔南義1999b）、「pə^vksə^vr-：日 Fuka」（俞昌均1980）、「 $*puk$ ：日 Fuka-」（板橋義三2003）、「伐ママ斯 $*pot-se$ 斯 - $*se$ adjectival finite/attributive. /-t/ could be an assimilation of /-k/ under the influence of the following dental.⁵⁶」（Vovin2017）

先行研究では「斯」を「高句麗語」の文法形態素と見るか否かの明示的言及の差が見える。音韻地位は「伏：通摶屋韻三等乙入声並母 房六切」「斯：止摶支韻開口三等甲入声心母 息移切」である。「斯」についての判断は保留し、語幹部分を以下のように仮に再建する。「買戸 $*mera$ 」と同じく大陸倭語における apocope の例と思われる。

$*puka- > *puk$ 大陸倭語

> fuka- 上代日本語

5. 11. 「乃勿=鉛」

「鴨渌水以北逃城七（簡略）鉛城本乃勿忽」（不明）189

諸家の解釈は以下の如くである。「naimul（おそらく namul）：namari「乃」は na をあらわすであろう」（村山七郎1962），「*namər：日 namari」（李基文1968），「*namur：日 *namari」（Beckwith2004），「*namil：日 namari」（宋敏1966），「乃勿 naimur は鉛の古訓と見られる。而して国語の「ナマリ」と其の源を茲に発するものではなからうか」（学習院大学東洋文化研究所・小倉進平2017），「*namə'l」（俞昌均1980），「*namur：日 namari」（板橋義三2003），「*namut」（Vovin2017）

李基文（1972/1975），南豊鉄（1981）に言われるように13世紀成書の『郷薬救急方』では「鉛」を「那勿」とし，高麗時代まで開城で「乃勿」系統の語が使われていたことが分かる。音韻地位は「乃：蟹摶海韻開口一等上声泥母 奴亥切」「勿：臻摶物韻三等乙入声明母 文弗切」である。なお，古韓音で「乃」は上古音の面影を残す *nö* となるが，第一音節主母音をどう再建すべきだろうか。仮に以下のようにする⁵⁷。

*namari > *namur 大陸倭語
 > namari 上代日本語

5.12. 「内米=池」

「内米忽〔一云池城一云長池〕」（黄海海州市）73

諸家の解釈は以下の如くである。「*naimi 恐らく *nami：日 nami（波）：満 nāda<nām-ta<*nām-ta「海」，ツングース語 namu」（村山七郎1962），「*nuami（池・海）：ツングース諸語 namu， lamu（海）：日 nami（李基文1968），「namey（rough water 瀑池）， *name（long 長）：日 *naga（long）」（Beckwith2004），「*nami：日 nami（波），：満 namu，ゴルディ語：lamu，

：エヴェンキ語 lamu, : ラムート語 nam (sea)」(宋敏1966), 「*naimi～*nam (海・池)」(都守熙2005b), 「nami (池)」(崔南熙1999b), 「*nar-mə̚r (大+水)」(俞昌均1980), 「*nami (池, 長池)：日 nami (波), : 満namu (海), : エヴェンキ語 lamu (海)」(板橋義三2003)。

音韻地位は「内：蟹摂隊韻合口一等去声泥母 奴対切」「米：蟹摂薺韻開口四等上声明母莫礼切」である。ツングース諸語との関係、意味のずれ、第1音節の合口性を仮に度外視して再建すれば次の如くである。

*nami > *nami 大陸倭語

> nami 上代日本語

5.13. 「勝・斤乙=木」

「勝=木」

「栗木郡 [一云冬斯勝]」(京畿始興郡果川面) 22

「斤乙=木」

「赤木県 [一云沙非斤乙]」(江原淮陽郡蘭谷面) 119

諸家の解釈は以下の如くである。「勝 kyei : 日 ki< *kei 木」(村山七郎1962), 「勝*key : 日 ki」(Beckwith2004), 「勝 (h) il : 日「キ」kö +」(高木雅弘2916), 「勝～斤乙 kə̚l」(俞昌均1980), 「勝 *vey 斤乙 *kil～*kir～*kin : オーストロネシア祖語 *kahiu (木)」(板橋義三2003)。

「勝」「乙」の音節末音が問題となるが流音を再建する。同じく *-r を再建し得る「尸」は「文峴県 [一云斤尸波兮]」(江原楊口郡水入面文登里) 114 の「斤乙=文」(MK *kirH) で出現し、咸安出土木簡にも訓主音從表記の「文尸」がある。郷札では accusative は「乙」、未実現動名詞語尾は「尸」と区別されるが、「勝」は両方に用いられる。「高句麗地名」での区別は未だこれを詳らかにしない。音韻地位は「斤：臻摂欣韻開口三等乙

平声見母 拳欣切」「勝：臻攝質韻開口三等乙入声曉母 義乙切」「乙：臻攝質韻開口三等乙入声影母 於筆切」である。以下を再建する。

$*kər > *ker$ 大陸倭語

$> *kəj > kī \sim kō$ 上代日本語

5.14. 「甲比・押=穴」

「甲比=穴」

穴口県 [一云甲比古次] (京畿江華郡江華面) 63

「押=穴」

猪達穴県 [一云烏斯押] (江原高城郡長箭邑) 145

諸家の解釈は以下の如くである。「甲比：日カヒ（倭人の南下の迹）」（河野六郎1957），「甲比 kappi：日 kafi（峠）：トルコ語 qapıv（門）qapča（峡谷），押 kap:kafi（峠）：トルコ語 qapıv（門）」qapča（峡谷）」（村山七郎1962），「甲 $*kap$ ：日 kafi（峠），古代トルコ語 $*kapiy$ （門）」（李基文1968），「甲比 $*kaippi$ ：日 kapi，押 fiaip」（Beckwith2004），「 $*kappi/ *kap$ （穴）：日 $*kaphi$ 」（宋敏1966），「甲比 kapi（洞・海）」（都守熙2005b），「甲比 kabə̚r」（俞昌均1980）。

音韻地位は「甲：咸摶狎韻開口二等入声見母 古狎切」「比：止摶旨韻開口三等甲上声幫母 卑履切」「押：咸摶狎韻開口二等入声影母 烏甲切」である。「押」の影母及びトルコ語を一度外視すれば「替ふ」の居体言を再建し得る。

$*kapi > *kapi$ 大陸倭語

$> kafi$ 上代日本語

5.15. 「伊=入」

諸家の解釈は以下の如くである。「：ツングース・満州語 i-」(村山七郎1962), 「*i- (入る) 日:ir- (入る):蒙古語 ire- (来る)」(李基文1968), 「*i: 日 *ir-」(Beckwith2004), 「terV- (入る)」(崔南熙1999a), 「水入 (買伊) mə̚ri (水 + i 接尾辞)」(俞昌均1980), 「i- (入) : ツングース語 i- : 蒙古語 ire- (来る)」(板橋義三2003), 「*i: proto-Insular Japonic *ir⁵⁸」(Vovin2017) .

崔南熙 (1999a), 俞昌均 (1980) を除いて, 日本語, ツングース諸語の「入る」モンゴル語の「来る」と比較している。音韻地位は「伊: 止摶脂韻開口三等乙甲平声影母 於脂切」である。ツングース諸語やモンゴル語を度外視し, 「入る」の居体言として再建すれば次のようになる。

*iri > *ii > *i 大陸倭語

> iri 上代日本語

5.16. 「次若=首」

「牛首州〔首一作頭一云首次若一云鳥根乃〕」(江原春川市) 93

後述するように「牛首州=首次若」の「首=牛」は典型的な韓語要素であり, もしもこれを大陸倭語とすれば「韓語 + 大陸倭語」の語構成を持つ地名になる。諸家の解釈は以下の如くである。「次若 tsunyak < *tunyak(首～頭) : tuno (角) 地名では牛・頭とあるが牛・角のことであろう」(村山七郎1962), 「*cinia : インドネシア祖語 *tunu」(板橋義三2003)。

村山七郎 (1962) は *t の破擦音化の例として「于次=五」「古次/忽次」とこれの 3 例を挙げる。音韻地位は「次: 止摶至韻三等甲開口去声清母七四切」「若: 宕摶葉韻開口三等甲日母 而灼切」である。

*tunjak > *tinjak > *tjinjak 大陸倭語

> *tunak > *tunaw > tuno 上代日本語

5.17. 「居戸=心」

「心岳城本居戸坪」（鴨緑以北 不明）184

諸家の解釈は以下の如くである。「*kür～*kir：日 *kikiri～*kükürü」（Beckwith2004），「kör：日 kökörö」（村山七郎1962），「*kəsə̚r」（俞昌均1980），「*kor：日 ko2ko2ro2：満州語 huhun（乳・乳房）：エヴェンキ語ukun（乳）」（板橋義三2003）。音韻地位は「居：遇摺魚韻開口三等乙平声見母 九魚切」である。アルタイ諸語との比較を度外視して仮に以下の再建を試みる⁵⁹。

*kəkərə > *kər 大陸倭語

> kökörö 上代日本語

5.18. 「買=川・水・井」

「買=川」

- a. 南川県 [一云南買]（京畿利川郡利川面）4
- b. 述川郡 [一云省知買]（京畿驪州郡興川面）7
- c. 泉川口県 [一云於乙買申]（京畿坡州郡交河面）38
- d. 伊川県本高句麗伊珍買県（江原伊川郡伊川面）52
- e. 橫川県 [一云於斯買]（江原橫城郡橫城面）95
- f. 深川県 [一云伏斯買]（京畿加平郡下面）102
- g. 猶川郡 [一云也戸買]（江原江華郡華川面）107

「買=水」

- a. 買忽 [一云水城]（京畿水原市）18

- b. 水谷城県〔一云買旦忽〕（黄海新溪郡多栗面）68
 c. 水入県〔一云買伊県〕（江原楊口郡水入面）117

「買=井」

泉井郡〔一云於乙買〕（咸南德源郡府内面德源）129

諸家の解釈は以下の如くである。「買を水又は川の義に用ひてある。買 *mai* なる語は今日の朝鮮語 *mir* と関係ある語であらう」（学習院大学東洋文化研究所・小倉進平2017），「買 *mi*（水，川，井戸）」（崔南熙1999a），「**ma(e)ri>ma(e)øi>ma(e)i>ma(e)y(me)*（買），cf. **mari~meri~miri~mir*（勿）」（都守熙2005b），「**mə̚r*（水）」（俞昌均1980），「買 *maŋ<*me*：日 *midu*」（高木雅弘2016），「買～米～弥 **mie*（水）：日 *mi*：エヴェンキ語 *mū*（水）：中世蒙古語 *mören*（江）」（李基文1968），「**mey*：日 **mey>☆mi*」（Beckwith2004），「**meɛ*」（Vovin2017：8），「**mey(川)*mer*（水）」（板橋義三2003）。

仁川に相当する「買召忽県〔一云弥鄒忽〕」も「水」に関連する可能性があり，「買」の再建音を考える際重要であるが二重表記でないので考慮の外に置く。

MK の「水」は *mirH* である。古代語形を求めれば **mer* が再建される。この他韓語でさらに「水」を表す形態素に {*ma*} ~ {*meɛ*} と {*mi*} が存在し，**mai* と **mir* が再建できる。民俗学の李경엽（2003：162）によれば，全北岬島では潮水の干満を表す単位として「han *ma*, tu *ma*, sə *ma~iər ma*」が用いられ，忠清道北部では「han *meɛ*, tu *meɛ*, sə *meɛ*…」が用いられる。都守熙（2005b：176）は1957年度の西海島嶼調査報告を引き，群山群島の於青島で「初一日 irkupmai [ilgummɛ]，初二日 iətərp mai…」のように干満の潮位が数えられることを述べ，これを高句麗地名語「買」と関連づける。このように潮位単位名詞 *ma~meɛ* は古形 **mai* に遡り得，「買」と関係のある可能性がある⁶⁰。

さらに、古代語の「水」には *mir の語形も再建できる。「芹 minari」「柄海鞘 mitətək」から *mir が再建され得、「水」の古代韓語として *mer ~ *mir を再建し得る⁶¹。

日本語との対比について考えれば 服部四郎（2018：318）が「みづ」の祖語形に *medu を建てることが参考になる⁶²。「買」の上古音は「支部」に属し、流音韻尾を措定できず、やはり倭語要素と見るべきであろう。

*me > *me 大陸倭語
 > *me (du) > *mi 上代日本語

5. 19. 「別=重」

「七重県〔一云難隱別〕」（京畿坡州郡積城面）36

諸家の解釈は以下の如くである。「別 = へ（重）」（新村出1916/1971），「pjəl：日 fā」（李基文1968），「*piar 日： *per」（Beckwith2004），「別 / parV（原・村）」（崔南熙1999a），「bə'l：日 Fe」（俞昌均1980），「*piet」（Vovin2017），「*biar：日 Fe2<PJ *piCa : MK pʌl」（板橋義三2003）。

音韻地位は「別：山摶薛韻開口三等乙入声並母 皮列切」である。次の語形を再建しておく。

MK pʌrH とは借用語の関係にあると考える。

*per > *pər 大陸倭語
 > fe 上代日本語

6. 韓語と解し得る語

6. 1. 本章の目的

以下では韓語としてのみ解し得る語を見る。

6.2. 「加戸=犁」

「犁山城本加戸達忽」（不明鴨緑水以北逃城）195

始めに河野六郎（1945）以外の諸説を見る。「*kal（犁）：MK.kal-（耕），karay（鋤）満州語：halhan, halgan（ploughshare）」（宋敏1966），「*karə̃r」（俞昌均1980）。宋敏（1966）は MK と満州語に言及しているが，河野六郎（1945/1979：244-245）は夙に次のような韓満比較を行っている⁶³。

kus- (kusi, kusu, kuži etc.) (馬槽)	: huju (馬槽)
kəl- (替る)	: hala-mbi (交代する)
kalbi (肋骨)	: halba (肩甲骨)
kadži (種類)	: haci-n (種類)
kadži (茄子)	: hasi (茄子)
<u>karə̃ < *kal-ge</u> (一種の鋤) ⁶⁴	: <u>halba</u> (犁の煙)
kurumme (影)	: helme-n (影)
kədu- (収める, 捲く)	: hete-mbi (捲く)
kjot' (側) 又 kjotureñi (腋)	: hetu (横)
kəlβ- (連ねる, 並べる)	: holbo-mbi (連ねる)
kul-tuk, kul-muk (煙突)	: hula-n (煙突)
*kal (粉)	: halu (細粉)

農耕関連語であり，かつ，鴨緑江以北に分布する韓・満共通語根として，韓語の分布，来源を考える際，極めて重要な意味を持つと考える。「高句麗地名」中の韓語要素として次の語形を再建する。

*kar⁶⁵ (耕す・鋤く) > MK karR-

6.3. 「斤戸=文」

「文峴県〔一云斤戸波兮〕」（江原楊口郡水入面文登里）114

諸家の解釈は以下の如くである。「*kīnr (kir) : MK kir」（李基文1972）, 「*kəl~*kərV」（崔南熙1999a）, 「*kə'sə'r」（俞昌均1980）。上述のように咸安出土木簡に「文戸」があり、MK kirH（文）に対応する。音借字表記である点が百済的である。「高句麗地名」中の韓語要素として次の語形を再建する。

*ker (文) > MK kirH

6.4. 「首=牛」

- a. 「牛岑郡 [一云牛嶺一云首知衣]」（黃海金川郡牛峯面）53
- b. 「牛首州 [首一作頭一云首次若一云烏根乃]」（江原春川市）93

a. は黄海岸, b. は日本海岸の内陸地域である。諸家の解釈は以下の如くである。「*sü:MK syo」（李基文1972）, 「*su」（崔南熙1999a）, 「*sur」（俞昌均1980）, 「*su (首) : 日 usi : MK syo」（板橋義三2003）。

河野六郎（1964–1967/1979 II : 295–519）で、朝鮮語史における次のような母音推移について述べている。

原始・古代 ⁶⁶	中期（15世紀）
i	i
r ⁶⁷	i
e	u ⁶⁸
ä ⁶⁹	e
ə	a
u	o

\ddot{u}^{70}

u

これらはよく知られるように通開一東冬韻合流後の主母音、山咸開三四等主母音の朝鮮漢字音における反映などから導き出された結論で、個々の母音の推移や音価について異見はあるものの、朝鮮語史研究において概ね受け入れられている説と言える。

音韻地位は「首：流摶有韻開口三等甲上声書母 書九切」である。「高句麗地名」中の韓語要素として次の語形を再建する。

$$^*sju \text{ (牛)} > MK sioH$$

6.5. 「於斯=横」

「横川県 [一云於斯買] (江原横城郡横城面) 95

諸家の解釈は以下の如くである。『*es : MK əs』(李基文1972), 「☆ü～☆i (crosswise, sideways 横) : 日 *iki～*ükü (id.)」(Beckwith2004), 「*əs : MK.əs」(宋敏1966), 「*əsə́r」(都守熙2005b), 「*asé」(崔南熙1999a), 「*əsə́r」(俞昌均1980)。音韻地位は「於：遇摶魚韻開口三等乙甲平声影母 央居切」「斯：止摶支韻開口三等入声心母 息移切」である。「高句麗地名」中の韓語要素として次の語形を再建する。

$$^*\varepsilon s \text{ (横)} > MK \varepsilon sL \text{ (横)}$$

6.6. 「今勿=黒」

「黒壤郡 [一云黄壤郡] 本高句麗今勿内県」(忠北鎮川郡鎮川面) 10

諸家の解釈は以下の如くである。『*kəmə́r : MK kəm-』(李基文1972), 「今

は黒の訓 kəm に宛てたものである」（学習院大学東洋文化研究所・小倉進平2017），「*kəmə-」（崔南熙1999a），「+kə^ˇmə'l」（俞昌均1980），「*kəmur（今勿）：日 kuro：MK kəm オーストロネシア祖語：gəlar（暗闇）」（板橋義三2003）。MK の kəm-R（黒い）の未実現動名詞 kəmirLH に相当すると思われる。現代語の漢字訓（用言の）-r/-ir は動名詞であり，故に，irs（尸）に起源する連体形のように後続平音を濃音化させない⁷¹。音韻地位は「今：深摺侵韻開口三等平声見母 居吟切」「勿：臻摺物韻三等乙入声明母 文弗切」である。「高句麗地名」中の韓語要素として次の語形を再建する。

*kəmer（黒）> MK kəmir

6.7. 「屈火=曲城」

「曲城郡本高句麗屈火郡」（慶北安東郡禮安邑郡臨河面）161

諸家の解釈は以下の如くである。「屈火 kubə'l（曲がる）：MK の kupir（「曲がる」の未完了動名詞）」（俞昌均1980）。俞昌均（1980）の説のように MK kup-L（曲がる）の未実現動名詞 kupir の古代語形 *küper と集落を表す新羅語 *per（伐～火～体）のついた *küperper=曲城と解し得る。「高句麗地名」中の韓語要素として次の二つの語形を再建する。

*küper（曲がる）> MK kupir（曲がる）

*per（城）> siəvirRL（都）の vir

河野六郎（1993）は『三国史記』地名から「集落 community」を表す新羅語，百濟語，高句麗語の要素を取り上げ，次のように分析している。

① 新羅語の「集落」

*puur（伐）

- | | |
|---------------------|--------------------|
| ② 韓語百濟方言（民衆語）の「集落」 | *puri (夫里) |
| ③ 『三国志』に見える3世紀の「集落」 | *piri (卑離) |
| ④ 百濟支配階級語の「集落」 | *kī (己) 日本語に借用「キ城」 |
| ⑤ 高句麗語の「集落」 | *kor (忽) |

また「斯盧」>「新羅」の名称について次のように述べる。

- ① 3世紀「斯盧」の字音 *sie-lâ
- ② 「盧」*lâ > *lo の字音変化により「斯羅」と表記を改める
- ③ 「斯羅」を美化して「新羅」とする
- ④ 日本語のシラギは sira-gi すなわち斯羅に百濟語 *kī がついた百濟語による新羅の呼称である⁷²。
- ⑤ 「徐羅伐、徐耶伐」は①の *sie-lâ に新羅語の *pur がついたものであり、新羅語形 *syəra-pur を表す。
- ⑥ 「徐羅伐、徐耶伐」はまた「徐伐とも書かれ」、*syə-pur を経て syəur 「都すなわちソウル」に発展した。

伊藤英人（2018a: 116）⁷³は「徐羅伐>徐伐」という表記の差でなく「*sirapiri>*sirapuri（円唇同化）>*sjerapur (*iの折れ, apocope)>*sjeapur（syncope）>*sjə:vur（母音推移, Ersatzdehnung, lenition）>səur（円唇同化, 短母音化）」の音韻変化を提案したが、本稿では、以下のように訂正する。

*siraperi > *sjəraper (*iの折れ, apocope) > *sjəaper (語中子音消失) > sjə:vur = MK siəvirRL (母音推移, Ersatzdehnung, lenition) > səur (円唇同化, 短母音化)」⁷⁴

なお、「忽=城」と韓語の「伐～火～体, 夫里」は別語であり、「屈火」の「火」は韓語形態素である。

6.8. 「波衣・波兮・巴衣=巖・峴・忽」

「=巖」

「孔巖県本高句麗齊次巴衣県」（ソウル市永登浦區西面陽川）24

「鶴鶴城〔一云租波衣一云鶴巖郡〕」（黃海鳳山郡楚臥面）75

「=峴」

「夫斯波衣〔一云仇史峴〕」（平南中和郡東頭面松峴）92

「三峠県〔一云密波兮〕」（江原楊口郡方山面）106

「文峠県〔一云斤尸波兮〕」（江原楊口郡水入面文登里）114

「猪蘭峠県〔一云烏生波衣〕」（江原淮陽郡內金剛面麻田里）121

「平珍峠県〔一云平珍波衣〕」（江原通川郡南面靈岩里）146

「=忽」

「童子忽県〔一云仇斯波衣〕」（京畿金浦郡霞城面）30

諸家の解釈は以下の如くである。「*phaui=pahoi=岩」（新村出1916）、「*pahyoi<*pafoi：日 ifafo<*i-papo」（村山七郎1962）、「波兮 *paxe～波衣/巴衣 *pa'i（巖）：MK pahoi (id.)：ギリヤーク語 pax（石）」（李基文1968）、「☆paiiy（巴衣）～☆paiy（波衣）～☆pavey（波兮）巖～山～岳～峠←Gilyak」（Beckwith2004）、「*pa(h)e<*hipa＜巖、峠＞」、高句麗語では日本語の C1iC2a～C1iC1o が C2aC1a のような形に」（高木雅弘2016）、「pahi（峠）」（最新版1999a）、「*pahi（峠）」（俞昌均1980）、「*pa?iy（巴衣～波衣）～*pavey（波兮）：オーストロネシア祖語 *batu」（板橋義三2003）。

韓語要素が平安南道に及ぶ例である。村山は上代日本語の「いはほ」と比較するが「いはほ」は「いはね磐根」に対して岩の「ほ（秀）」⁷⁵である。

音韻地位は「波：果摶戈韻合口一等平声幫母 博禾切」「巴：仮摶麻韻開口二等平声幫母 伯加切」「衣：止摶微韻開口三等乙平声影母 於希切」「兮：蟹摶齊韻開口四等平声匣母 胡鷄切」である。ニヴフ語を度外視して「高句麗地名」中の韓語要素として次の語形を再建しておく。

* pahwei ~ * pakwei > MK pahoiLH (岩)

6.9. 「波旦=海」

「海曲 [一作西] 県本高句麗波旦県」(慶北蔚珍郡遠南面徳新里) 157

諸家の解釈は以下の如くである。「波☆ pa (sea) : 日☆ pa in pama (seashore,beach)」(Beckwith2004), 「*patən : MK patər」(俞昌均1980), 「*patan (波旦) OJ wata MK patah」(板橋義三2003)。

1988年に発見された蔚珍鳳坪里新羅碑(527年)に「波旦」の地名が発見され実在が確認された。漢の地域で6世紀以降新羅に属した地域であるが、典型的な韓語形態素である。「曲／西」は訓表記に反映されていないと見る。音韻地位は「波：果摶戈韻合口一等平声幫母 博禾切」「旦：山摶翰韻開口一等去声端母 得按切」である。「旦=谷」とは矛盾するが、「旦」は *tər を表したと考えられる⁷⁶。俞と同じく *patər (海) が再建され得る。MKで「海」を parərLH といい、『紀』神功紀等の「波珍」の古訓「ハトリ」などからも古代韓語(新羅語) *patər (海) が再建される。

一方、次の地名がある。

「海利県本高句麗波利県」(江原三陟郡遠德面湖山里) 155

これについて諸家の解釈は以下の如くである。「恐らくは波利は parər を書き表したものなるべく、後波利を海利に改めたのは波利に海の義の存

した結果と見ねばならぬ」（学習院大学東洋文化研究所・小倉進平2017），「^{*p}alə́y̥r（俞昌均1980）。「海利」は音借字表記「波旦」を新羅式の訓主音徒式に表記した同じく ^{*p}atə́r（海）を指すものと思われる。

板橋義三（2003）の例示する MK の patah（海）は現代語の pata（海）に繋がる patahLH であるが、別語であり、「平面状」のものを指す patak ~pataŋ と单語家族をなす⁷⁷。また板橋は上代日本語の wata を挙げるが、これが仮に ^{*p}tah の借用語だったとしても、上代日本語には /w/ が存在するのになぜ /p// で借用したのか説明が必要となる。なお、波旦県は秦氏の故地ともされる。「高句麗地名」中の韓語要素として次の語形を再建しておく。

^{*p}atə́r > MK par \wedge rLH

6.10. 「悉=三」

「悉直県〔一云史直〕三陟郡本悉直国」（江原三陟郡三陟邑）165

歛の本拠地の地名に韓語形態素が現れることが注目される。俞昌均（1980:343）は「悉」に ^{*sə́r} を再建し「土」の意味ではないかとするが、「悉直=三陟」の二重表記を無視した解釈である。これに対して河野（1945/1979:262）は、新羅語純粹の数詞「三」は「悉直国>三陟」の「悉 siet=sei」であり「これが今日の朝鮮語に繋がる」と述べている⁷⁸。

音韻地位は「悉：臻摶質韻開口三等甲入声心母 息七切」である。「三」の MK は sə́kR ~ sə́ihR⁷⁹であるため、古代韓語の「三」の末音は -k ~ -h であったと考えられる。舌内入声-tが ^{*-k}を表すのに用いられている⁸⁰。「高句麗地名」中の韓語要素として次の語形を再建しておく。

^{*s}ə́k > MK sə́kR ~ sə́ihR

6.11. 「滅鳥=馬」

「駒城〔一云滅鳥〕」（京畿龍仁郡駒城面）5

諸家の解釈は以下の如くである。「滅鳥 *miəro (駒)」（都守熙2005b）、「*mara (馬)」（崔南熙1999a）「*məlar」（俞昌均1980）、「滅鳥 *mälo」（馬淵和夫ほか1979）、「滅鳥 *meru (colt 駒)：日 uma 宇麼」（Beckwith2004）、「滅鳥 *meru (clt 駒)：MK məŋaci：満州語 ma：ナナイ語 mori：蒙 morin：日 ma」（板橋義三2003）。

多くが「鳥」を「馬」の一部と見るので対し崔は「鳥=城」と看做している。音韻地位は「滅：山摺薛韻開口三等甲入声明母 亡列切」「鳥：遇摺模韻合口一等平声影母 哀都切」である。アルタイ諸語との関連を度外視して、「高句麗地名」中の韓語要素として、今仮に「鳥」を含めないものと含めた二つの語形を再建しておく。

*məru ~ *mər > MK mərL

6.12. 「沙熱=清」

「清風日本高句麗沙熱伊県」（忠北堤川郡清風面）99

諸家の解釈は以下の如くである。「沙熱 *šaniar (cool 清) : *samu (cool, cold)」（Beckwith2004）⁸¹、「：沙熱 (saiər) は清風の清の訓 sar に当るものであることは想像され得る。清の訓 sar の如く呼ぶものあることは（中略）清川県を薩買県（薩の音 sar）といへるにて知るを得べく」（学習院大学東洋文化研究所・小倉進平2017）、「「沙」も「沙戸」も「薩」（清川江=薩水）も本来二音節の言葉であった可能性が「沙戸」（あるいは「薩」）が日本語の「サラ」sara《更・新》と対応するのに対し、「沙」sa (< *saja) は「サヤ・カ《清》」の「サヤ」と対応しよう。「熱伊」《風》njər.i は日本

語の「ナラ・ヒ」《寒風》に似ている」（高木雅弘2016）、「沙熱伊 sanəli（涼 + i接尾辞）」（俞昌均1980），「*seneri（沙熱伊） 清風：MK sənil-涼」（板橋義三2003）。

「沙熱伊=清風」における「伊」と「風」の関係も不明である。また、今回の対象でない百濟地名に「沙戸=新」があり、高木雅弘（2016）が指摘するように「薩水=清川江」も考慮すべきである。音韻地位は「沙：仮摂麻韻開口二等平声山母 所加切」「熱：山摂薛韻開口三等甲入声平声如列切」である。「高句麗地名」中の韓語要素として次の語形を再建しておく。

*sanər- > MK sanər-HL「涼冷」

6. 13. 「伐力=緑」

「緑驥縣本高句麗伐力川県」（江原洪川郡洪川邑）94

諸家の解釈は以下の如くである。「*bə'lə'k : MK の phiri-（青い）」（俞昌均1980），「*bor（伐）～*puruk（伐力）：MK puru-」（板橋義三2003）。音韻地位は「伐：山摂月韻合口三等乙入声並母 房越切」「力：曾摂職韻開口三等甲入声來母 林直切」である。「力」は韻尾が対応せず、また語頭子音の有気性もないと仮定する。「高句麗地名」中の韓語要素として次の語形を再建しておく。

*perer- > MK phirir-LH（青，緑）

6. 14. 「伊伐支・伊火兮=鄰」

「伊伐支県〔一云自伐支〕」鄰川縣本高句麗伊伐支県（慶北榮豊郡浮石面）112

「縁〔一作様〕武県本高句麗伊火兮県」（慶北青松郡安德面）162⁸²

諸家の解釈は以下の如くである。「*ipir 鄰」（都守熙2005b）、「伊伐／自伐／sepal（大邑）」（崔南熙1999a）、「*ibə́l」（俞昌均1980）、「*iboc- : MK i'uc（鄰）」（板橋義三2003）。

「伊伐支」の「支」の解釈が問題となる。また「縁」と「鄰」を共に「鄰」と解し得るか、「武」は何かが問題となる。異本校勘、地誌諸文献との比較が必要である。音借字「伐」と訓借字「火」の異表記が注目される⁸³。伊=自」をどう考えるか、問題が残る。音韻地位は「伊：止摶脂韻開口三等乙甲平声影母 於脂切」「伐：山摶月韻合口三等乙入声並母 房越切」「支：止摶支韻開口三等甲平声章母 章移切」「兮：蟹摶齊韻開口四等平声匣母 胡鷄切」である。ここでは「支」「兮」を *ki と考え、MK までに口蓋化したと仮定する。「火」は訓借字 *per（火）である。「高句麗地名」中の韓語要素として次の語形を再建しておく。

*iperki > *ipertfi > *ivirts > MK iucLH（隣）

6.15. 「夫斯・扶蘇=松」

- a. 「松岳郡本高句麗扶蘇岬」（京畿開城市）57
- b. 「松峴県本高句麗夫斯波衣県」（平南中和郡東頭面松峴）92
- c. 「松山県本高句麗夫斯達県」（咸南文川郡北城面野汰里）130

諸家の解釈は以下の如くである。「*pusa>*puso（松）」（都守熙2005b）、「*pase（松）」（崔南熙1999a）、「*bə́sə́r」（俞昌均1980）、「*busu（扶蘇）～*busi（夫斯）：MK pus」（板橋義三2003）。

音韻地位は「夫：遇摶虞韻合口三等乙平声幫母 甫無切」「扶：遇摶虞韻合口三等乙平声並母 防牟切」「斯：止摶支韻開口三等甲入声心母 息移切」「蘇：遇摶模韻合口一等平声 素姑切」である。「松」と「樺」の意味のずれはあるが、「高句麗地名」中の韓語要素として次の語形を再建し

ておく。

* puts > MK pocH ~ R (権)

6. 16. 「述尓・首泥=峯」

「述尓忽県 [一云首泥忽] 峰城原本高句麗述尓忽県」(京畿坡州郡州內坡州里)

39

諸家の解釈は以下の如くである。「述尔 šuri～首泥 šuni: MK sunirk(嶺)」(李基文1972), 「峰を述の字で書きかへてある。高麗百濟に通ずる語で当時峰を述 (siur) の類似音を以て呼んだに相違ない。今日峰を poŋsuri, 頂を tiəŋsuri などといひ suri なる語の存するのは古語の遺物であらう」(学習院大学東洋文化研究所・小倉進平2017), 「*suri (峯・上)」(都守熙 2005b), 「*šüri (峰)」(崔南熙1999a), 「*suri」(俞昌均1980)。音韻地位は「述：臻摶術韻合口三等入声 食聿切」「首：流摶有韻開口三等甲上声 書母 書九切」「尓：止摶紙韻開口三甲等上声日母 児氏切」「泥：蟹摶齊韻開口四等平声泥母 奴低切」である。「高句麗地名」中の韓語要素として次の語形を再建しておく。

* sünerk > MK sunirkLH (嶺)

7. 尚後攷に俟つべき語

性急に倭語と結び付けず「高句麗語」あるいは「百濟王族語」である可能性を考慮しつつ検討すべき以下の語がある。

「熊 = 功木」⁸⁴ 「玉 = 古斯」 「忽 = 城」⁸⁵ 「達 = 山・高」 「仇斯 = 童子」 「奴・内・惱・

「弩 = 壤」「沙伏・沙非 = 赤」「於乙 = 泉」「廻 = 足」「坤・押 = 岳」「骨 = 黄」「烏斯・鳥生 = 猪」「加知 = 東」「要隱 = 楊」

性急に韓語と結び付けず「高句麗語」あるいは「百濟王族語」である可能性を考慮しつつ検討すべき以下の語がある。

「首 = 新」「也尸 = 狩」「也次 = 母」

8. 仮説

- ① 絶対年代は不明ながら、紀元前のある時期に朝鮮半島を南下し、倭語話者は日本列島に移住した。一方、大陸側に残存した倭語話者は、韓語等との言語接触を通して音韻的革新を経つつ、8世紀半ばまで大陸倭語として本来の言語を保持していた。
- ② 鴨緑江以北地域を含む朝鮮半島で、韓語と倭語はモザイク状の分布を示していた。
- ③ 大陸倭語は8世紀日本語東国方言と似た音韻変化を示す。

① の傍証として『隋書』の以下の記述が参考となる。

「其人雜有新羅・高麗・倭等。亦有中国人。」百濟条

「其人雜有華夏・高麗・百濟之属。」新羅条

「又至竹斯国。又東至秦王国。其人同於華夏。」倭国条

7世紀初頭の朝鮮半島、日本列島の諸国が多民族、多言語が入り混じる地域であったことが分かる。

大陸倭語と韓語の分布を示せば以下の通りである。

●大陸倭語

☆古代韓語



言語地図作成：黒澤朋子氏

鴨綠江以北の三地点は比定地不明であり、地点は意味を持たない。

② の例として、次のような語末母音消失／apocope の例を挙げ得る。「蒜／藠 *mera > *mer」「谷 *tani ~ *təni > *tan ~ *tən」「五 *itu > *ytʃ」「深 *puka > *puk」

③ 「高句麗語」における *t の破擦音化は夙に村山七郎（1962）が指摘している。筆者の再建形で示せば以下の例である。「五 *itu > *üč」「首／角

*tunjak > *tʃinjak」「口 *kurti > *kurtʃi ~ *kutʃi」。

8世紀東国方言の破擦音化では、*amotʃitʃi = omotiti（父母）の*t > *tʃの例が知られるが、大陸倭語と上代東国方言のこれらは偶然の並行的改新であろうか。筆者は、5世紀末以降長野県南部から関東にかけて造営された積石塚古墳、東国における馬（牧）などに見られる高句麗文化の普及及び対朝鮮外交における上毛野氏の活動などから推して、上代東国方言と大陸倭語における破擦音化が全く無関係であると看做すのは難しいのではないかと考える。

9. 小結及び今後の課題

先に今後の課題について述べれば以下のことことが残されている。①漢字音再建の精度を上げる、②アクセント（声調）の再建、③「高句麗地名」中の大陸倭語候補、「不明」の検討、④馬韓殘余勢力圏（全羅道地域）地名の倭語の視点からの再検討、⑤新羅・伽耶地名及び④の近年の出土資料を加えた再検討、⑥『書紀』の朝鮮半島地名との比較、⑦『説文解字』楽浪番国（歲）産物名の研究、⑧考古学等他分野研究成果との比べ合わせ

本稿における考察を通して「高句麗地名」が少なくとも倭語と韓語の二つの言語要素を含むものであることが明らかになった。両言語で解し得ない語が「高句麗語」「百濟語」「濊語」である可能性を含め検討が必要となる。少なくとも757年の地名改正の表記に携わった新羅の官人は大陸倭語を解していたと考える他なく、前掲の分布図と、濊人が3世紀以来単々大嶺東西に分布していた事実から推して、その言語、すなわち大陸倭語が、濊語であった蓋然性が最も高いと現時点では考えている。

謝辞

本稿は、新学術領域「ゲノム配列を核としたヤボネシア人の起源と成立の解明」（研究代表：斎藤成也国立遺伝学研究所教授）言語班（代表：遠藤光暁青山学院大学教授）の研究協力者謝金による成果である。斎藤、遠藤両先生、及び内容面で多くの助言を下さった諸兄姉にこの場を藉りて感謝申し上げます。

注

- 1 本稿では原則として日本の常用漢字体を使用する。
- 2 句読点は日本の高校国語科の方式に従って付ける。ただし「、」は「、」にする。
- 3 Ulman (2016: 4) も多くの先行研究をレヴューリつづ、高句麗地名と高句麗領域の不一致に注意すべきことを強調している。
- 4 「中宗本」「中宗七年本」など様々な呼び名があるが、顯宗実録字本を「顯宗本」などと恰も顯宗代に刊行されたように誤解を与える李朝王年号による呼称は用いず、刊記、序跋等の年号及び刊行地による。日本統治時代の資料は明治、大正、昭和及び京城等を用いる。以下同。
- 5 慶北月城郡安康邑玉山里の晦齋李彥迪(1491–1553)後孫家旧蔵本。宝物第525号。「玉山書院には同板零本の『三国史記』が蔵されるため玉山李氏本とする」と田中俊明(1980: 86)は述べている。
- 6 同書八巻九条「鶴鴟：後漢音 *puk puə ヤツガシラ（鳥類“戴勝”）」、「鶴（+鷗）後漢音：*wik puk 水鳥の一種（鷗の類？）」なども韓語、日本語に比較し得る語形を見出し難い。
- 7 各時代の中国辺疆、ベトナムの地名の漢字地名の在り方を参照する必要があろう。
- 8 したがって、日本列島の「谷タニ」などとの現時点での言語地図の作成、列島倭語地名との地理的分布の議論は行うべきでないと考える。
- 9 猪と同語の「貉 亡各反」は形声声符から本来 *klák で「句麗 *kəu-liäk」と同じものを指したが、句麗が貉族の一種であることからそのまま貉の字音としたとする。(ibid.14)
- 10 福井玲(2013: 180)は河野説に触れつつ、「漢の字音は、上でも述べたように、中國語では去声であり、仮に上古音では -d という韻尾をもっていたとする説を採用するなら、jeri という語形とこの字音とつながりができるようと思われる」と述べている。金完鎮(1970/1971: 105)はMKの「倭 iər」と彗星歌の「倭理」を「倭」の上古音 *iwar 及び「夷」の上古音 *diər と関連付けた。
- 11 爾昌均(1999)は「漢」の語に *gsar ~ *gasar を再建し、それが *gar 系と *sar 系に二分されたとする。*gar 系が「貉、句麗」に、*gwar 系が「漢」に、*gan 系が「韓」に、*·jar/ ·jwar 系が「倭」に、*sar 系が「斯盧、斯羅」に分化したとする。更に、夫余の「迦葉原」、奈良の「樞原」、高千穂の「樛觸」との関連にも言及している。
- 12 百濟本紀には漢城百濟と「靺鞨」との戦闘が数多く記され、戦闘の地も正に「高句

- 麗地名」の地域である。「冬十月，靺鞨掩至，王帥兵逆戰七重河，虜獲酋長素牟送馬韓。」
 (卷二十三 百濟本紀始祖十八 (BC1) 年条) の素牟は中国式姓名ではない。
- 13 『魏書』烏桓鮮卑東夷伝の表記は以下「東夷伝」とし、条名を挙げるに留める。
- 14 この銅印は「駝鉢」であり、倭への「蛇鉢」ではない。
- 15 503年に百濟王斯麻（武寧王）の命により大和の工房に派遣され銅鏡（隅田八幡人物画像鏡）を作成し、即位前の繼体に贈った際の派遣技術者「穢人今州利」が日本列島において確認される濱人の活動の痕跡である。
- 16 以下、『三国史記』の表記は略し、卷数、王年月条等のみを示す。
- 17 卷第四十蜀官志・武官条に出る。「靺鞨国民」が濱人を指すことについては李成市(1997: 25) 参照。
- 18 地名表記は王権側の文書行政と不可分であるためである。伊藤英人(2016)で述べたように、他民族に先行して漢字使用を開始し、半島各地を移動していた濱人の漢字表記を三国の王権が受容したと考えれば「高句麗地名」に代表される大陸倭語要素を濱語と看做すことは十分に可能であろう。中国辺疆の漢字民族である広西の壮族地域等の漢字圏における地名漢字表記の諸相との比較検討が要請される。後述の如く、高句麗による楽浪郡接收が313年、平壤遷都が427年であり、本格的な漢城地域侵攻が5世紀後半、しかもその支配は長く続かず、新羅に押し戻されたという歴史的経緯から鑑みて、「高句麗地名」中、「城／忽」等の行政単位以外の地名に、韓語と倭語類似の語が頻出し、後者が「高句麗語」ではなく、先住民族である濱人の言語であった可能性はかなり高いと見るべきであろう。
- 19 Pellard (2007) による日本語史、言語学からの批判がある。Vovin (2017:8) は「高句麗地名」の語を pseudo-Koguryō と呼んでいる。
- 20 551年に羅済同盟で漢城を奪還するが新羅に奪われ、その後は新羅領となる。
- 21 盧泰敦(2012: 24-26) 参照。
- 22 後述するように「高句麗漢字音」における *_t>*_r の音韻変化を認めるか否かが問題となるが、行政単位名に支配者の言語が使用されることは自然である。
- 23 広開土王碑文中の破格的表現が正格漢文の範囲からはずれるものでないことについては權仁瀚(2016: 239)、伊藤英人(2018b: 32) 参照。
- 24 行政単位改称により、現在は「忠州高句麗碑」と呼ばれるが旧称を用いる。
- 25 南豊鉉(2014: 69)、南豊鉉(2000/2009) 参照
- 26 同じくアルタイ型言語の王権を含む五胡十六国、鮮卑系の北魏にはこうした変則漢文は存在しない。伊藤英人(2018b)は高句麗のこうした変則漢文を「確信犯的中国語侵犯」とし、高句麗型華夷思想の所産と看做した。こうした変則漢文の書写の過程で少なくとも「脳内訓」が生じていたと考えられる。
- 27 王姓の「高」は北燕王の高氏に由来する(井上秀雄 1983 II:24)。井上秀雄(1983 II: 24)はまた扶余王の解夫妻の注釈として「解は太陽を」意味するとする。確かに「解」の MK の字音は hʌiR であり「太陽」は MK では hʌiH で、両者の音相は類似する。

しかし「解」の音韻地位は「蟹摂蟹韻二等開口上声見母 佳買切」であり、MKに引き寄せて「太陽」と解してよいかは慎重を期すべきである。

28 810年に渤海使節の首領高多仏が脱走し、越前に留まり、その後越中に移されて史生羽栗馬長と習語生等に渤海語を教授した（『日本後紀』弘仁元年五月条）。高姓であるところから、高多仏の教授した「渤海語」は高句麗語であった可能性が高い。高多仏はその後その功により帰化し高庭高雄を名乗った。平安期の日本では渤海を「高麗」と呼び高句麗の繼承国家と看做していた。福井県史編纂委員会（1993：345）は「このときも越前の官人のなかに、渤海語を解するか、もしくは漢字による筆談の可能であった人物がいたに違いない。意志の疎通のまったく不可能な状態で、使節団からの脱走がありえたとは考えられないからである。」とするが、平安初期の越前と渤海の頻繁な交流を勘案すれば越前の官人中に渤海語を解する者があった可能性は否定できない。いずれにせよ広義の「夫余系」言語との言語接触の貴重な記録である。

29 Janhunen（2003）も百濟語と日琉語を近いと看做す。The language of Paykcey was Para-Japonic. (*ibid.*: 482)

30 この始祖伝説は日本の百濟系氏族にも共有された。「皇太后。其百濟遠祖都慕王者。河伯之女感日精而所生。」『続日本紀』延暦八（789）年十二月附載。『新撰姓氏録』には「都慕王」を祖とする六氏族があるとされる。瀬間正行（2018：134–138）参照。

31 「因都王夫余，故北夷有夫余國焉。東明之母初妊時，見氣從天下。」『論衡』吉驗。

32 「二子」は百濟始祖沸流・温祚のこと。井上秀雄（1983：272）は「中国浙江省紹興地方か」とする。

33 「百濟開國已來，未有以文字記事。至是，得博士高興，始有書記。」百濟本紀近肖古王条。

34 百濟 297 号木簡「□城下部対德疏加鹵」の「鹵」字が稻荷山鉄劍銘「獲加多支鹵」と字形を同じくする。武寧王陵（527 年）の「斯麻王」も一種の音借字表記であることは周知の如くである。503 年に武寧王が即位前の継体のために大和で鋳造させた隅田八幡人物画像鏡銘にも「斯麻」「意柴沙加」の音借字が見られる。日本国字と考えられてきた「畠」が 2006 年発見の 7 世紀初頭「全南羅州伏岩里出土木簡」「畠一形得六十二石」に発見されたように日本の漢字文化との深い関係を持つ。

35 百濟滅亡時まで中国沿海に始祖伝承を持つ百濟貴族が存在した。「公諱素士，字素，楚國琅琊人也。（簡略）七代祖崇，自淮泗浮於遼陽，遂為熊州人也。」『大唐古云麾將軍左衛將軍上柱國來遠郡開國公祢府君墓誌銘並序』拝根興（2012：303）

36 朝鮮半島住民の唐への連行、徙民については拝根興（2012）参照。

37 南豊鉉（2014：72–73）参照。出土資料からは「集落」を示す「火」と「伐」が同一形態素 *per を表したことから知り得る。権仁瀚（2018）は更に進んで 2017 年公開の咸安城山山城 17 次発掘調査分出土木簡（6 世紀中後期）の分析から荷駄木簡の「〇〇負」=「〇〇發」現代韓語 pari（荷駄）から「負」は訓表記、「發」は音借字とするが、果たしてそうであろうか？荷駄木簡の「負」字を荷駄の発送者と取れば「發」を義で

- 解する可能性も皆無ではないとのご教示を橋本繁氏から頂戴した（橋本繁氏 pc.2019年2月6日10時30分）。なお慎重を期すべきか。
- 38 527年の蔚州鳳坪里新羅碑の「居伐牟羅」の「伐」が出土資料から確認できる。韓国国字「体」の諧声符が「本」であるなら、-n 韻尾の流音化も考慮に入れる必要がある。
- 39 数字は「高句麗地名解釈一覧（三訂版）」の数字である。
- 40 数字は同上。道名は略称を用いる。地名比定は井上秀雄（1983Ⅲ）による。
- 41 新羅語にこの訓があったことは同じ「良州」の「密津県＝推浦県」から知り得る。
- 42 零細な例から考えられる粗形を建てる作業なしに「大陸倭語」の音韻体系の実相に迫れないため、暫定的な再建形を提示し、音韻変化の仮説を示すことにする。
- 43 「日」は上代日本語、「満」は満州語。同義の場合括弧内の語義を省略する。
- 44 「十握劍 tötukanötürugi」参照。
- 45 原著の「ギリヤーク語」等は「ニヴフ」に統一する。
- 46 牙喉音の区別を捨象し仮に*gとする。有声／無声の対立も未だ不明であるがここでは仮に中古音の清濁に従う。
- 47 井上秀雄（1986Ⅲ：191）も「森」とする。
- 48 「MK」は後期中世韓語、「蒙」はモンゴル文語。
- 49 金完鎮（1980）参照。
- 50 筆者は古代韓語（新羅語）形 *manər を再建する。
- 51 音借字表記が多くを占める点で「高句麗地名」の表記は「疎加齒」「斯麻」などの音借字を多用する百濟の漢字使用に似ている。
- 52 Vovin（2017）が⁵ proto-Insular Japonic に*m̥era を再建する日琉語史的根拠については疑問が残る。
- 53 河野六郎（1993）では牙音と喉音の混同も倭語とこれら地名の原語の音韻的類似の証左とされる。
- 54 黄海道長山串はcaŋsankocと読まれる。「串」を「岬」に宛てるのは漢字の朝鮮的用法なのだろうか。
- 55 また上代日本語の「クシ=串」と MK kocL（串：地名でなく串刺しの串）の関係を借用語と見るべきであろうか。河野六郎（1949/1979 I : 557-562）は MK の/o/と日本語の/u/の母音対応として「kura 谷：kor 谷」「kusa 草：koc 花」「kusi 串：koc 串」「kufa-si：美 kop～kof 美」「fuku 河豚：pok 河豚」「kudira 鯨：kora 鯨」「suka-su 賢す：sok- 欺かれる」の例を挙げている。借用語が多く含まれよう。これらは古代韓語においては/u/であり、15世紀までに韓語で生じた母音推移によってこうした対応を示すことになったと考えるのが通説である。
- 56 「伏」を「伐」と見間違えたものと思われる。
- 57 第2音節の母音も問題となる。
- 58 Etymologies based on a single phoneme are always unreliable, but in this case we can

suppose that process similar to the reduction of -r- in Ryukyuan has also taken place in the pseudo-Koguryoic. (Vovin2017 : 28)

- 59 因みに Starostin, et al. (2010:230) は「モンゴル語派」祖語形 *kokön (breast) 及び「ツングース語派」祖語形 *kuku-n (id.) と日本語 kōkōrō を同源と見ていない。
- 60 「買」の再建音を中古音的な母音と見た場合である。
- 61 崔南熙 (2005) は minari, mitotek, mikkuraci (泥鮓) から *mi を措定する。また千素英 (1990 : 182–192) 参照。
- 62 複合語を構成する mi が me となることはないとされる。中澤光平氏によるご教示 (2019年2月10日東洋文庫開催第1回古代漢字音音訳資料研究会席上)。
- 63 河野六郎 (1944・1979 I : 536) では, 「kez (辺) : xeshen (界)」, 「mezem (心) : muji-len (心), muji-n (志)」, 「aze (弟) : aji- (小さい)」などの韓満比較例が挙げられている。
- 64 韓語史における -*g- の脱落は河野六郎 (1945/1979) の「主題」の一つである。
- 65 MK の上声に対応する「高句麗地名」中の語の長短をどう考えるべきか尚後攷に俟つ。
- 66 河野六郎 (1954/1979 II 257) では「原始朝鮮語」, 河野六郎 (1964–1967) では「古代朝鮮語の間に起こった大変動」(ibid.512) としている。なお, 河野の「古代語」の下限は 14 世紀である。
- 67 河野六郎 (1979 II) で「尊敬法接辞 -si- が中期語で陽母音を取る」のは「*i の名残であろう」とする (ibid.511)。なお, *e>*w(「漢字音」では w への変化の時期は明言されていない。
- 68 本稿の MK 転字では i で表記する。
- 69 河野六郎 (1993) では *e とされている (ibid.28)。古代韓語の ä を本稿では /ɛ/ で表記する。
- 70 河野六郎 (1954) に「ここには ü と書いたが, その正確な音価は判らない」とある。(ibid.257)
- 71 「見 por kiən[polgiʌn~polkjʌn]」参照。伊藤英人 (2012) 参照。
- 72 シラキのキは乙類であることが木簡資料その他から判明している。
- 73 用語を修正した。
- 74 日本語の「郡・評コエホリ」は百濟民衆語 *kəpuri (大きな集落) の借用と看做しえる。問題は MK kəorhLL (郡・邑) の語形の説明である。以下の音韻変化を仮定する。
[*kəper (新羅語) > *kəpir (母音推移) > *kəpər (順行同化) > *kəvər (lenition) > kəorLL (MK) > koir~kor (現代韓語「郡」が, kəorhLL 末音の h (『杜詩諺解』重刊本には kəorkh の例もある) の説明は難しい。]
- 75 『時代別国語辞典 上代編』94 頁。
- 76 -n 韵尾の流音化の例を見る。
- 77 「掌」 MK sonspataŋLLH 参照。

- 78 河野六郎（1945）では「新羅語」に濶の影響を認め、伽耶を「国語に近い韓語」と見ていたが、河野六郎（1957, 1993）では新羅語＝韓語と捉え直した。
- 79 又「三日」sahʌrlH 参照。
- 80 「達=山・高」と関係する。
- 81 Robbeets (2007:4-5) は Beckwith 氏のこの恣意的な、無理やり日本語との同源を企図した、為にする再建を批判し、MK sanʌr- との関連を正しく指摘している。
- 82 正徳本で「武」は避諱欠筆、「兮」は兮の八をヰに、「稼」は「木篇にノの下に羊+一點」となっている。
- 83 橋本繁（2018a）によれば「伊伐支」が咸安城山山城木簡に見られる。
- 84 MK komR～komaLH, 日本語 kuma, 「熊」上古音から、「熊」の語は Wanderwort である可能性が高い。
- 85 伊藤英人（2019a）では諸先行研究を概観しつつ「高句麗の南下に伴い、後の高句麗三州に「忽」を置いたとすれば、数百年の間に「溝渕>忽」という apocope があり、南下の結果獲得した領土に高句麗語の「○○城」を置いたとするのは妥当な推論」であるとした。その上で、河野六郎（1949 / 1979 I :557-562）が MK と上代日本語の「o: u」の対応例として「谷 kor : kura」を挙げていることから、「谷>城」の意味変化の可能性について、①集落に「洞」を宛てるのは高麗時代から見られ、『龍歌』に洞=kor, 『訓蒙字会』に「衢 ho korR 衢 korR ton 俗称衢衢」があることから、『訓会』時期には都市の横丁も korR といったことが分かる、②これは時代的には kʌorLL (MK) >koir～kor のように「郡」と「谷」の語形が同じになるのに先行している。「谷>「集落」の意味変化が MK 以前に起っていたと考えるべきかもしれない、とした。中村新太郎（1925-26 / 1994 : 175）は「一般に朝鮮の民居は広き平地以外では山谷中に散布され、民居なき谷は甚だ稀で、よもやと思ふ狭き谷、小さき谷、森で覆はれた谷の中にも見出すのである。」と述べ、善生永助（1933 / 1994 : 242-243）も同様の言及をしている。『魏書』高句麗条「多大山深谷、無原沢。隨山谷以為居、食澗水。」も参照。「衢衢」や「里」との意味の差は考慮すべきながら、「忽=谷>集落=城邑」の意味変化が早い時期から生じており、麗代以降に「城邑>洞里」の意味変化が更に生じたと見るべき可能性を排除できない。日本語との比較では、上代日本語の「クラ谷」の典拠、アクセントなどが問題となり得る。
- 86 アルファベット順。中国語は拼音、韓語は Yale system、日本語はヘボン式による。

論文・著書⁸⁶

- 辯根興（2012）『唐代高麗百濟移民研究 以西安洛陽出土墓志為中心』中国社会科学出版社
- Beckwith, C. (2004) *Koguryō: The Language of Japan's Continental Relatives: An introduction to the Historical-Comparative Study of the Japanese- Koguryōic Languages, with a Preliminary Description of Archaic Northeastern Middle Chinese.*

Leiden: Brill.

- 千素英（1990）『古代国語 語彙研究』高麗大学校民族文化研究所出版部
- 崔南熙（1999a）『高句麗語研究』博而精
- 崔南熙（1999b）『古代国語表記漢字音研究』博而精
- 福井玲『韓国語音韻史の探求』三省堂 2013年
- 福井県史編纂委員会（1993）『福井県史通史編』1 <http://www.archives.pref.fukui.jp/fukui/07/kenshi/tuushiindex.html>
- 学習院大学東洋文化研究所（2017）小倉進平博士原稿『語彙—新羅及高麗時代』学習院 東文研調査研究報告 No.61
- 橋本繁（2018a）「蔚州川前吏書石原銘・追銘にみる新羅王権と王京六部」『史滴』40 早稲田大学東洋史懇話会 2018年12月20-38
- 橋本繁（2018b）「韓国・咸安城山山城木簡研究の最前線」『季刊 古代文化』70-3：64-71
- 服部四郎（2018）上野善道補注『日本祖語の再建』岩波書店
- 板橋義三（1996）「高句麗、新羅、百濟の古代三国における「戸」の音価とその言語的相違」『言語科学』第31号 九州大学言語文化部言語研究会：15-31
- 板橋義三（2003）「高句麗の地名から高句麗語と朝鮮語・日本語との歴史的関係をさぐる」共同研究報告書日本語系統論の現在 日文研叢書第31集
- 板橋義三（2019）『日本語と朝鮮語の方言アクセント体系と両言語の歴史的関係に関する理論的・実証的研究—比較言語学、言語接触、歴史社会言語学の視座から—』現代図書
- 伊藤英人（1995）「申景濬の『韻解訓民正音』에 대하여」『国語学』25：293-306
- 伊藤英人（2008）「浅談有關“借字表記法”研究的幾箇問題」遠藤光暉・巖翼相編『韓漢語言研究』学古房 455-466
- 伊藤英人（2012）「古代・前期中世朝鮮語における名詞化」『東京外国语大学論集』第85号, pp.77-104, 東京外国语大学
- 伊藤英人（2013a）「韓漢語言接触史初探—從對抗中國化的觀點出發」『第五届韓漢語言學國際學術研討會論文集』, pp.6-37
- 伊藤英人（2013b）「朝鮮半島における言語接触—中国圧への対処としての対抗中国化—」『語学研究所論集』第18号, pp.53-93, 語学研究所, 東京外国语大学
- 伊藤英人（2013c）「旅庵의 漢字音—ユ 韓國의 特徵과 普遍性」『旅庵申景濬先生生辰三百周年紀念國際學術會議論文集』pp.53-93, 全北大学校人文学研究所
- 伊藤英人（2014a）「高麗時代口訣資料における用言連体形について」『日本語学会2014年度秋季大会予稿集』pp.45-48, 日本語学会
- 伊藤英人（2014b）「他地域における訓読 朝鮮半島」, 中村春作他編『訓読から見なおす東アジア』, pp.59-71, 東京大学出版会
- 伊藤英人（2016）「古代朝鮮半島諸言語に關する河野六郎説の整理」「日本語の起源はど

- のように論じられてきたか：日本言語學史の光と影」第4回共同研究會 2016年9月18日，国際日本文化研究センター 2016年
- 伊藤英人（2018a）「古代・前期中世朝鮮語の諸相」『東洋文化研究』20号 105–129
- 伊藤英人（2018b）「韓中言語接触의 観点에서 본 韓國漢字文」『語文研究』180号 2018冬号 27–62
- 伊藤英人（2019a）「いわゆる「高句麗地名」をめぐって」第1回古代漢字音音訳資料研究会 2019年2月10日 東洋文庫7階会議室
- 伊藤英人（2019b）「いわゆる「高句麗地名」をどう考えるか」ヤポネシアゲノム・言語班 2018年度第二回研究集会 2019年2月24日 与那国町観光協会会議室
- 伊藤英人（2019c）「いわゆる「高句麗地名」をどう考えるか」ヤポネシアゲノム第1回公開講演 2019年3月24日 メルパルク京都
- Janhunen (2003) A Framework for the Study of Japanese Language Origins, <http://publications.nichibun.ac.jp/region/d/NSH/series/niso/2003-12-26-1/s001/s025/pdf/article.pdf>
- 金完鎮（1970/1971）이른時期의 있어서의 韓中言語接觸의 一斑에 對하여：金完鎮（1971）『国語音韻体系의 研究』一潮閣
- 金完鎮（1980）『郷歌解読法研究』 서울대학교出版部
- 金文京（2010）『漢文と東アジアー訓読の文化圈』岩波書店
- 河野六郎（1944/1979）「満洲国黒河地方に於ける満洲語の一特質—朝鮮語及び満洲語の比較研究の一報告—」京城帝国大学文学会編『学叢』第三号, I
- 河野六郎（1945/1979）『朝鮮方言学試攷—「鉄」語考—』京城帝国大学文学会論纂第11輯, 東都書籍
- 河野六郎（1949/1979）「朝鮮語と日本語の二三の類似」八学会連合編『人文科学の諸問題—共同研究 稿』, I
- 河野六郎（1954/1980）「唐代長安音における微母に就いて」東京教育大学『中国文化研究会会報』第4期第1誌, II
- 河野六郎（1955/1979）「朝鮮語」服部四郎・市河三喜編『世界言語概説下巻』研究社, I
- 河野六郎（1957/1980）「古事記に於ける漢字使用」『古事記大成（言語文字編）』平凡社, III, (『古事記大成（言語文字編）』平凡社, III, (『古事記に』)
- 河野六郎（1964–1967/1979）「朝鮮漢字音の研究」『朝鮮学報』31–44, II, (『漢字音』)
- 河野六郎（1979）『河野六郎著作集』1・2, 平凡社
- 河野六郎（1980）『河野六郎著作集』3, 平凡社
- 河野六郎（1987）「百濟語の二重言語性」『朝鮮の古文化論讀—中吉先生喜寿記念論文集—』中吉先生の喜寿を記念する会編, 国書刊行会 81–94
- 河野六郎（1993）「三国志に記された東アジアの言語および民族に関する基礎的研究」平成2・3・4年度科学研究費補助金一般研究（B）研究成果報告書, 東洋文庫
- 權仁瀚（2016）《廣開土王碑新研究》, 博文社

- 權仁瀚（2018）「新出土 咸安木簡에 对한 言語文化史的研究」『木簡文字』21：99–134
韓國木簡學會
- 李基文（1968/1991）「高句麗의 言語와 그 特徵」『白山學報』4 1968年；『國語語彙史研究』
- 李基文（1972/1975）『國語史概說』改訂版 1972年；藤本幸夫訳『韓國語の歴史』大修館書店
- 李基文（1975）『韓國語の歴史』藤本幸夫訳 大修館書店
- 李경업（2003）「西南海地域 民俗文化의 特性과 活用方向」『韓国民俗学』37：157–187
- 馬淵和夫・李寅泳・大橋康子（1979）『三国史記』記載の「高句麗」地名より見た古代高句麗語の考察 文藝言語研究 言語篇4, 1–47, 筑波大学
- 松江崇（2019）「揚雄『方言』における「朝鮮」方言語彙について」第1回古代漢字音音訃 資料研究会 2019年2月10日 東洋文庫7階会議室
- 溝口睦子（2009）『アマテラスの誕生—古代王権の源流をさぐる』岩波新書, 岩波書店
- 森博通（2011）『日本書紀成立の真実 書き換えの主導者は誰か』中央公論社
- 村山七郎（1962）「日本語および高句麗語の数詞—日本語系統問題に寄せて—」『国語学』第48集
- 村山七郎（1963）「高句麗語と朝鮮語の関係に関する考察」『朝鮮学報』26輯 189–198
- 内藤湖南（1907/1971）「日本満州交通略説」明治四十（1907）年 内藤湖南全集第一卷 築摩書房昭和四十六 1971年：9–26
- 中村新太郎（1925–26/1994：159–224）「朝鮮地名の考説」『朝鮮地名研究集成』草風館
- 南豊鉄（1981）『借字表記法研究』檀国大学校出版部
- 南豊鉄（2000/2009）「中原高句麗碑의 解讀과 吏讀的 性格」《高句麗研究》，高句麗研究會／南豊鉄（2009）pp.166–189
- 南豊鉄（2009）《古代韓國語研究》，시간의 물레
- 南豊鉄（2014）「韓國の借字表記法と發達の日本の訓點の起源について」藤本幸夫編（2014）『日韓漢文訓読研究』勉誠出版 pp.67–94
- 盧泰敦著・橋本繁訳（2012）『古代朝鮮 三国統一戦争史』岩波書店（原著 노태돈『삼국통일전쟁사』서울대학교출판부, 2009년）
- 小倉慈司（2016）『古代東アジアと文字文化』，同成社
- Pellard T. (2007) Review:Christopher Beckwith (2004) *Koguryō: The Language of Japan's Continental Relatives: An introduction to the Historical-Comparative Study of the Japanese-Koguryōic Languages, with a Preliminary Description of Archaic Northeastern Middle Chinese.* <https://hal.archives-ouvertes.fr/hal-00194111>, Submitted on Dec 2007
- 李成市（1989）「蔚珍鳳坪新羅碑の基礎的研究」史学雑誌 98–6 史学会
- 李成市（1997）「穢族の生業とその民族的性格」『朝鮮社会の史的展開と東アジア』武田幸男編 3–97
- 李成市（2000）『東アジア文化圏の形成』山川出版社

- 李成市（2015）「平壤樂浪地区出土《論語》竹簡の歴史的性格」『国立歴史民族学博物館研究報告』194, 201–219
- Robbeets, M. (2005) International Conference on the Language(s) of Koguryo and the Reconstruction of Old Korean and Neighboring Languages, Conference Report, September 23 –23, 2005 Center of Korean Studies at University of Hamburg, Germany, 209–216
- Robbeets, M. (2007) Koguryo as Missing Link, *Festschrift for Boudewijn Walraven*, Leiden CNWS, 118–141
- 瀬間正之（2018）「高句麗・百濟・伽耶の建国神話」『東洋文化研究』第20号 學習院大学東洋文化研究所 131–153
- 新村出（1916/1971）「国語及び朝鮮語の数詞について」『藝文』1916年4月；『新村出全集』第一卷 筑摩書房
- 宋敏（1966/1999）「高句麗語의 apocope 에 대하여」『聖心語論文集』4, 1966年；「高句麗語の語末母音消失について」伊藤英人訳『韓国語と日本語のあいだ』草風館
- Starostin, et al. (2010) An Etymological Dictionary of Altaic Languages https://www.bulgari-istoria-2010.com/Rechnici/etymological_dictionary_of_altaic_languages.pdf
- 末松保和（1937）『新增東国輿地勝覧索引』朝鮮総督府中枢院
- 高木雅弘（2016）「『三国史記』『地理志』の高句麗地名漢字：おもに日本語との比較による考証」東洋文庫書報 第47号
- 武田幸男（1997）「朝鮮の古代から新羅・渤海へ」礪波護・武田幸男（1997）『隋唐帝国と古代朝鮮』中央公論社所収
- 田中史生（2016）「漢字文化と渡来人」小倉慈司（2016）所収
- 田中史生（2019）『渡来人と帰化人』角川書店
- 田中俊明（1980）「『三国史記』の板刻と流通」『東洋史研究』39–1 京都大学
- 田中俊明（2008）「朝鮮三国王都の変遷」<http://publications.nichibun.ac.jp/region/d/NSH-series/niso/2008-12-26/s001/s025/pdf/article.pdf>
- 都守熙（2005a）『百濟語研究』제이엔씨
- 都守熙（2005b）『百濟語語彙研究』제이엔씨
- 礪波護・武田幸男（1997）『隋唐帝国と古代朝鮮』中央公論社
- Ulman, V. (2016) The Language of the Koguryo State: A Critical Reexamination, Silva Iaponiarum, č. no 2016s.64–98, ISSN1734–4328
- Vovin,A. (2017) Origins of Japanese Language, Oxford Research Encyclopedia of Linguistics, <http://linguistics.oxfordre.com,online publication date:sep.2017>
- 吉本道雅（2009）「穢貊考」『京都大学文学部研究紀要』48 : 1–25
- 俞昌均・橋本万太郎（1973）「郷歌表記文字の上古音の一側面—特例「戸」の音価 ユ 淵源에 对하여 하여」『新羅伽耶文化』第5輯 1–29
- 俞昌均（1980）『韓国古代漢字音의 研究 I』啓明大學校出版部
- 俞昌均（1999）「濶」『文字에 숨겨진 民族의 淵源』集文堂

善生永助（1933/1994：237–367）「朝鮮の聚落・名称編」『朝鮮地名研究集成』草風館

辞典類

『時代別国語大辞典 上代編』三省堂 1967 年

『우리말 큰사전 옛말과 이두』 한글학회 어문각 1992 年

宋基中『古代国語語彙表記漢字의 字別用例研究』 서울大學校出版部 2004 年

이은규『古代韓國語借字表記用例辭典』제이엔씨 2006 年

ハングル転写

ㄱ k, ㄴ n, ㄷ t, ㅌ f, ㅁ m, ㅂ w, ㅍ p, ㅎ v, ㅅ s, ㅈ z, ㅊ fi, ㅋ q, ㆁ η, ㆁ c,
ㅊ ch, ㅋ kh, ㅌ th, ㅍ ph, ㅎ h, ㅏ a, ㅓ i, ㅗ iə, ㅜ io, ㅡ u, ㅣ iu, ㅡ ue, ㅓ i,
ㅗ a, ㅏ ai, ㅓ oa, ㅡ uə, L 平声, H 去声, R 上声